

續水菴七絕集

目次

第一部 閑居雜詠

湯島聖堂論語素讀始	6	田家訪友	18
敬老院春	8	春郊散策	20
元朝晴景	10	代悲索居老嫗	22
臘梅	12	野徑薔薇	24
丘上看雲	14	愍野老	26
春雨看花	16	車窗望海	28
		夏朝偶作	30
		曉聽杜鵑想假寓翁	32

第二部 客中偶詠

水村初夏	34
梅天偶作	36
颯風一過	38
吃荔枝	40
夏日田家	42
函山夏雨	44
小齋殘暑	46
林亭蟬響	48
新涼讀書	50
繪島吟行	52
秋晴好日	54
敬老院讀古典會	56
西域矚目	84
垓下	86
古廟秋風	88
湖畔憶石湖居士	90
拜杜工部墓	92
秋風樓	94
函關古道	96
昭明太子讀書臺	98
周莊舟行	100
楊升菴祠	102

萬樹秋晴	58
多久聖廟釋菜	60
湯島聖堂秋	62
先儒展墓	64
過舊居	66
展幕焚香	68
初冬偶作	70
蓮塘晚步	72
冬夜讀書	74
燈前聯句	76
立春喜雪	78
雪徑看梅	80

第三部 詩會題詠

過少陵	104
車上歡談	106
羽州名月莊觀月	108
尋武田氏末裔隱棲地	110
過日野俊基墓	112
隱岐行宮 後鳥羽上皇	114
菅茶山墓	116
悼中野逍遙	118
春日郊行	122
春舍酣眠	124

閑居雜詠

第一部

東海道中	126	寒日野望	148
詠白牡丹	128	山湖垂釣	150
黛玉送春	130	大雪埋檐	152
樹陰對酌	132	芙蓉暮雪	154
徙居偶作	134	歲暮祭詩	156
山居訪友	136	橋下待人	158
遠尋隱士	138	夜雨孤愁	160
秋夜思鄉	140	江頭離宴	162
秋山曉景	142	源氏物語明石上	164
秋夜聽雨	144	清夜彈琴	166
耆老長嘆	146	小督局	168
作詩に支えられて	170	岸頭望海	166
		俊寛	166
		觀美人圖	168
		額田王	170

湯島聖堂
論語素讀始

湯島聖堂
論語素讀始

旭旆翩翩吉日晨

旭旆翩翩たり吉日の晨

怡怡來集好文人

怡々として來り集う好文の人

廟前俱誦聖賢語

廟前俱に誦す聖賢の語

聲徹晴天淑氣新

聲は晴天に徹りて淑氣新たなり

旭旆 旭旆。日の丸の旗 怡怡 喜び楽しむ

ここ数年、元旦は東京お茶の水の湯島聖堂で、斯文会主催の「論語素讀始め」に参加することになっている。素読講座担当の先生の後について、「論語」を一句ずつ、参加者全員で声を合わせて読むのだ。毎年一編、「論語」は二十編あるので、全部読み終わるには二十年かかるわけだが。午前、午後と二回行われ、素読講座受講者だけでなく、誰でも自由に参加できる。親に連れられた小学校低学年の子供が参加することもある。孔子を祀る大成殿の下に、参加者用の椅子が並べられており、参加者は一回大体百名くらいであろうか。

先ず全員で大成殿に向かって拝礼して始まる。晴れた大空の下（一度だけ雪が舞った年があったが、いつもよい天気だ）、聖賢の語を大声で朗誦すると、心がすがすがしくなる。そしてこの一年も無事に過ごすことができるように思われるのである。

敬老院春

敬老院の春

百餘翁媪壽偏長

百余の翁媪壽偏に長し

又值新正會一堂

又新正に値いて一堂に會す

忘利忘名酌椒酒

利を忘れ名を忘れて椒酒を酌む

笑顔開處麗初陽

笑顔開く処初陽麗かなり

新正 年の始め 權酒 正月に飲む祝い酒。お屠蘇

私の入居している老人ホームには、百数十名が暮らしているが、皆さんお元氣である。最近杖をつく人などが増えてはきたが、それでもお年を何うとびつくりするほど若々しい方が多い。

元旦は平日の七時半より遅く、九時から食堂が開く。明るくい日差しがあふれる食堂には、お供え餅など正月のお飾りや、見事な活け花などが飾られている。それに集まってきた人々も皆正装、すてきな和服姿の女性もおられ、普段とは違うはなやかな雰囲気になっている。

新年の挨拶を交わしたあと乾杯、お雑煮などのお祝い膳をいただく。これまでの長い人生、皆それぞれに苦しいこと、辛かったこともあったであろうが、そのようなことは忘れてみなよい笑顔だ。

厳しい生活を強いられておられる人も多い中、多くの人に支えられ、安らかな晩年を過ごすことができる幸せを、ありがたく思う。

元朝晴景

元朝晴景

雲散風和四望鮮

雲散じ風和ぎ四望鮮やかなり

元朝曳杖曲汀邊

元朝杖を曳く曲汀の辺

忽聞笑語川原上

忽ち笑語を聞く川原の上

父子嬉嬉揚紙鳶

父子嬉々として紙鳶を揚ぐ

家から二十分ほど歩くと多摩川の土手に出る。対岸は東京の和泉多摩川と呼ばれるところ、丁度よい散歩コースである。

滔々と流れていく川を見ていると、心が洗われるようで、つい時間を忘れてしまう。サギやカモメなど、水鳥も沢山集まってくるので楽しい。河原ではサツカーに夢中になっている少年たちや、楽器を奏でて音楽を楽しむグループなど、いつも賑やかである。

ある年の元日の朝、朝食までかなりの時間があつたので、多摩川へ散歩することにした。よく晴れて、冬とは思えないほど暖かい。しかし元旦のためか、さすがに河原に人の姿はほとんど見えない。ひっそりとした河原を上流の方へと歩いていくと、子供のはしゃぐ声が聞こえてきた。見ると、父親とまだ幼稚園児らしい二人の子供が風を揚げようとしているのだった。その楽しそうに笑い声を聞き、私までほのほとした気持ちになることができた。

臘梅

臘梅

馥郁東風到几邊

馥郁たる東風几辺に到る

始知牆角臘梅妍

始めて知る牆角臘梅の妍なるを

慈萱晚歲自栽樹

慈萱晚歲自ら栽うる樹

一朵插瓶靈位前

一朵瓶に挿す靈位の前

臘梅 よい香りがただよ

几 つくえ

慈萱 母

靈位 位牌

母は交通事故に遭い歩けなくなつた父を、十三年間介護した。留守にした時、何かあつてはいけなないと、近所の買物に行くにも小走りであつた。その母の唯一の楽しみが花を育てることだつた。狭い庭であつたが、実にいろいろな花を植えていた。

好きな花の一つが臘梅だつた。正月などよく臘梅の花を活けていた。庭に植えたのは何時頃だつたのであろうか。そもそも臘梅は普段は目立たない木なので、私は全くこの木に気付かなかつた。

春先のよく晴れた日、よい香りに誘われて庭に出ると、片隅に細い木が点々と黄色い小さな花をつけていた。早速教枝（詩では一朵としたが、細い臘梅の枝は一枝では寂しい）を折り取つて仏壇に供えた。

背中の丸まつた小さな母が、この木を見上げてゐる姿が目には浮かぶ。母は生前にこの花を見ることができたのだらうか。遺影の母の顔がかすかにほほえんだように感じられた。

丘上看雲

丘上看雲おかしやうくもを見る

原頭日暖曳藜杖

原頭日暖げんとうひあたたかく藜杖れいじょうを曳ひく

丘上風輕坐草茵

丘上風輕おかしやうかぜく草茵くさいんに坐ぎす

漫看白雲舒卷態

漫まろに看みる白雲舒卷はくうんじゆけんの態たい

天空興趣屬閑人

天空てんくうの興趣きんじゆは閑人かんじんに屬ぞくす

藜杖 あかざの杖、軽いので老人用とされる

舒卷 ひろがったり巻いたりする

子供の頃住んでいた藤沢の家は、なぜそんな家を父が借りたのかわからないが、外見は立派な家であった。五段の石段を上ったところに大きな門があり、その奥に二階建の家があった。庭も広く、小さいが池もあった(もつともこれは戦争が激しくなると壊されて畑になってしまったのだが)。

但し家は古かった。二階にバルコニーがあったが、下の洋室に雨が漏れることもあった。しかし、私はこのバルコニーが好きだった。晴れた日はいつもそこに上り、空の雲を眺めて長い時間を過ごしたものだ。戦後東京に移り、勤めるようになってからは、空を眺めるゆとりなどなくなつたが、今はやつと自由な時間が持てるようになった。

近くの丘に上り、草の上に腰を下ろして空を見上げる。雲はさまざまな姿を見せてくれ、見飽きることがない。年を取って又子供時代と同じように、天空の興趣を心ゆくまで楽しめるのはありがたいことだ。

春雨看花

春雨花を看る

長堤一路曳吟笈

長堤一路吟笈を曳く

江畔果園春雨濃

江畔の果園春雨濃やかなり

淡白梨花帶珠露

淡白の梨花珠露を帯ぶ

坐思寂寞貴妃容

坐るに思ふ寂寞たる貴妃の容

時節 詩を考えながら曳く杖

川崎市のはずれ、多摩川沿いの地域は、嘗て多摩川梨の産地として有名だった。初秋の頃は観光バスが何台もやって来て、梨もぎの人々でにぎわったものである。

今はほとんどが住宅地となつてしまつたが、それでもまだところどころに梨畑が残つていて、四月中旬ともなると、一面に咲く白い梨の花を見る事ができる。

このあたりは桜も多いので、少し前までは花見の人々が大勢集まつてきたのだが、梨の花を見に来る人はほとんどいない。まして、雨の日ともなれば働く人の姿もなく、ひっそりとしていて、ゆつくりと花を楽しむことができる。

心ゆくままに細かい雨の中をそぞろ歩きをすれば、浮かんでくるのは白居易の「長恨歌」の一句、梨花一枝春雨を帯ぶである。白い花が雨露を帯びてひっそりと咲いている様子は、確かに仙界の楊貴妃の形容にふさわしいと「長恨歌」のすばらしさを思わされる。

田家訪友

田家に友を訪ぬ

漫行野徑物光暄

漫ろに野徑を行けば物光暄かなり

引蝶花開嫩草繁

蝶を引きて花開き嫩草繁し

鶻鶻村墟訪郷友

鶻々たる村墟郷友を訪ぬ

一鷄先噪到柴門

一鷄先ず噪きて柴門に到る

鶻鶻 なごやかな気配の満ちている

村墟 むらざと

鶻々 へんげんげん

昭和三十年代半ばに越して来た川崎の郊外には、ぼつぼつ都会風の家が建ちかけてはいたもの、まだ梨畑や水田が広がり、その中に古い農家が見られる土地であった。

越して間もなく、知り合いになった友人の家に招かれたことがある。白い梨の花が咲いている頃で、高啓の花を看還た花を看る、ような道を歩いて行くと現われた、茅葺き屋根が彼女の家であった。

広い庭には鶏が放し飼いにされて、自由に餌を漁っている。天井の高い居間には大きな囲炉裏があり、自在鉤がかかっていた。

その周りに坐っておしゃべりを楽しんだが、帰りに御自分の田の畦で摘んだ芹をいただいた。その芹の柔かくおいしかったこと、今でも忘れられない。

しかし間もなく、その家も今風に建てかえられ、鶏も姿を消した。そして田圃だった処にはマンションが建ち並び、二度とあの芹を味わうことはできなくなってしまった。

春郊散策

しゅんこうさんさく

晴天郊野野風柔

せいてんこうやのやまかぜのやさし

戲蝶尋花乘輿遊

あそびたてはなをたづねるりまにのぼる

忽看古祠光滿處

たちまちふるいにふるひかりあふ

幼孩嬉笑逐鳴鳩

おとこがわらわらしてうめうめをたづね

幼孩 幼ない子

川崎というと、公事都市と思われる人が多いようだが、東京都と多摩川を挟んで向き合う北部は、以前は田園地帯であった。今はほとんど住宅地に変わってしまったが、それでも処々に、梨園や田圃、貸農園などがあり、散歩するのに適した場所である。

特に古くからこの地に住んでおられる人の家の庭は広く、いろいろな花樹が植えられており、楽しませてもらっている。四季それぞれによいが、春は梅にはじまり、さんしゅゆ、こぶし、桃、雪柳などが次々と開き、思わず遠くまで足を運んでしまう。

多摩川の近くに古いお社がある。普段は人も余り訪れないせいか、いつも鳩が沢山集まり餌を漁っている。ある春の朝、この神社の前を通りかかると、かわいらしい笑い声が聞こえてきた。歩き始めたばかりらしい女の子が、若い両親に見守られながらよちよちと鳩を追っていたのだ。明るい春の日ざしの中、なんとも心暖まる光景であった。

代悲索居老嫗

索居を悲しむ老嫗に代る

獨守家居待子回

獨り家居を守りて子の回るを待ち

庭花愛育久堪哀

庭花愛育して久しく哀みに堪う

薔薇馥郁無人到

薔薇馥郁として人の到る無し

唯看遊蜂求蜜來

唯看る遊蜂の蜜を求めて來るを

索居 ひとり寂しく住む 老編 老女

以前住んでいた家の近くに、かなり年を取られた女の方が、一人暮らしをしておられた。息子さんがおられるという噂があったが、その姿を見かけることはなかった。

その方は一日中、庭で花の世話をしておられた。そして門前を通りかかる人を、誰彼となく呼びとめては花を一枝差し出されるのである。礼を言ってもらう人もいるが、うるさそうに振り切っていく人も多い。そういう時、庭にもどられる後姿は、肩を落としてなんとも寂し気であった。

一年中いろいろな花を育てておられたが、最も美しかったのはバラであった。赤、白、黄など、さまざまな色の花が咲き乱れ、よい香りのただよう時は、近所の人が訪れることもあったようだが、一番見てほしかったのは息子さんではなかったろうか。しかし、この家に若い人の声が聞かれることはなく、蜜を求める蜂たちがわがもの顔に飛びまわっているだけであった。

野徑薔薇

野徑の薔薇

野徑爽涼天霽時

野徑爽涼たり天霽るる時

薔薇萬朶最清奇

薔薇萬朶最も清奇なり

好風吹到散香處

好風吹き到つて香を散ずる處

行客賞花移步遲

行客花を賞して歩を移すこと遅し

向ヶ丘遊園地は残念ながら閉園になってしまったが、その一面のバラ苑はポランテアの人達のおかげで今も存続しており、春と秋の二回、半月ほど公開されている。

そこは遊園地駅からバスで四停留所ほどの所にあるが、二つ目の飯室という停留所から、「バラ苑アクセスロード」というのがある。ここもポランテアのおかげでいつも花が咲いている。

特に春から初夏にかけては、水仙、花もも、雪柳、つつじなどが次々と目を楽しませてくれるが、なんといってもすばらしいのがバラの花だ。さまざまな色の花が咲き乱れ、ここが「バラ苑」かと間違える人もいほど。盛んに写真を撮っている人も多い。年寄りが丘の上の「バラ苑」に行くのは少々大変だが、平地のこの路なら安心だ。

いつも目にするのが黙々と手入れをされているポランテアの姿。おかげでこのすばらしい風景を楽しませていただき感謝している。

愍野老

野老を感む

人家櫛比路西東

人家櫛比す路の西東

村變市街農事空

村は市街に變じて農事空し

停杖多年勵耕處

杖を停む多年耕に勵みし處

獨懷青稻戰春風

獨り懷かしむ青稻の春風に戦ぎしを

櫛比 くしの齒のようにすきまなく、ぎつしり並ぶ

五十年ほど前、川崎の郊外に引越した。当時「公害都市」として有名だった川崎の中心部とは異なり、梨畑や田圃の広がるのどかな田園地帯だった。

ところがまもなく、それらは次々と消え、住宅地となっていた。丁度都会の人達が住宅を求めており、又息子たちが農業を継ごうとしないため、土地を売る農家がふえ、農業は急速にすたれていったのだ。

農地を売り豊かになったため、古いわら屋根の家々も、明るいモダンな家に変わった。しかしそこに住む老人達は、なんとなく所在無げで、寂しそうである。

以前なら朝早くから一日忙しく働いていたのに、今はやることがない。家のまわりを歩いても昔とはすっかり様子が変わってしまったって、着かない。時々野菜を買っていたおばあさんから悩みを打ち明けられたことがある。そのことを思い出し、老翁の気持ちに変えて詠んでみた詩である。

車窓望海

車窓に海を望む

恢復禍災猶未成

禍災を恢復すること猶未だ成らず

驅車三陸自傷情

車を三陸に駆れば自ら情を傷ましむ

鯨呑市里怒潮海

市里を鯨呑す怒潮の海

今日蒼茫波浪平

今日蒼茫波浪平らかなり

恢復 回復

鯨呑 一口に呑みこむ

市里 町

怒潮 たけりたつうしお

東日本大震災の四年後、友人達と南三陸町を訪れた。宿泊したホテルでは、震災を風化させまいと、スタッフが町をバスで案内し、震災の様子を語る「語り部バス」を運行している。

よく晴れた四月の朝、私たちもそのバスに乗ることにした。案内をしてくださるのも被災をされた方、説明に実感がこもる。

窓外には広々とした砂浜が広がる。建物などみな波に吞まれたまま、何も復興していないのだ。人々の姿もない。時折見える仮設住宅のあたりにお年寄りの姿が見えるだけ。

特に衝撃的だったのは、赤い鉄骨がむき出しになって残る防災対策庁舎。この二階の放送室で、若い女性が町民に「津波が来ます。高台に逃げてください」と呼びかけ続け、自らは津波にさらわれてしまったところ。柱に沢山の千羽鶴が空しく風に揺れていた。

それにしても、あれほど恐ろしい形相を見せた海が、その日はなんと穏やかだったことか。静かに寄せる波の前に感慨はつきなかつた。

夏朝偶作

夏朝偶作

早曉開窗積雨晴

早曉窓を開けば積雨晴る

前山翠色轉鮮明

前山の翠色転た鮮明

爽涼書屋寫經處

爽涼たる書屋写経する処

聽得新鵲裂帛聲

聽き得たり新鵲裂帛の聲

覆雨 長雨

夏鳥聲

きぬをさくようなほととぎすの鳴き声

六月生まれのせいか私は初夏が好きだ。次第に夜明けが早くなり、四時半頃にはすっかり空が明るくなる。窓をあけると、吹き入る爽やかな風に頭もすつきりする。

特に雨後の朝はすばらしい。前山（実際は低い丘陵だが）の木々の緑の鮮やかなこと、心まで洗われるような思いがする。

さらにほととぎすの聲が聞こえてくるのだ。漢詩の世界では、蜀の亡命した天子が死後ほととぎすになったという故事から悲しい鳥とされているが、私には夏の到来を告げる鳥である。日本人は万葉集以来ほととぎすを愛してきた。山口素堂の『目には青葉山ほととぎす初經』の句のように初夏の鳥として。

特徴のある鳴き声に加え、「枕草子」に「水無月になりぬれば音もせずなりぬる」とあるようにわずか一ヶ月くらいしか聞かれないのもよい点であろうか。爽やかな初夏の早朝、ほととぎすの聲を聞きながら写経をすると、よい一日を過ごせるような気持ちになる。

曉聽杜鵑想
假寓翁

曉に杜鵑を聴き仮寓の
翁を想う

寥寥假寓奇殘生

寥寥たる仮寓殘生を奇す

災後三年轉愴情

災後三年転た情を愴ましむ

獨夜思郷天欲白

獨夜郷を思えば天白まんと欲す

空聞蜀鳥促歸聲

空しく聞く蜀鳥歸るを促がす声

假寓 かりずまい 殘生 余生 蜀鳥 杜鵑。ほととぎす

今年もまた、ほととぎすが鳴くころとなった。以前はこの声を聞くのを楽しみにしていたが、今は單純に喜ぶことはできなくなつた。

東日本大震災から数年後、南三陸地方を旅したことがある。浜辺に残っているものはほとんどなく、少し奥に入ったところに仮設住宅が作られていた。同じ造りの建物が続いているが、ひっそりと静まり返っている。ただその家の前に、お年寄りが数人、ぼんやりと立っておられた。震災前には港で働いたり、畑を耕したり、また近所の人達と話を交わしたりされていただろうに、それらをすべて失つてしまわれたのだ。

ほととぎすは「不如歸去（帰った方がいいよ）」と鳴くといわれる。

しかしこの人達には、帰るところがなくなつてしまつたのだ。特に高齢の人にとつてどんなに辛いことか。震災に苦しむ人達のところでは、ほととぎすも鳴くのを遠慮してもらいたいものだと思う。

水村初夏

水村初夏

初夏田疇農事繁

初夏の田疇農事繁し

插秧到暮水邊村

插秧暮れに到る水辺の村

村翁三五鋤返

村翁三五鋤を荷いて返る

新月野畦蛙鼓喧

新月の野畦蛙鼓喧し

挿秧 田植えをする

もうずいぶん前のことになるが、新聞紙上で、ある高名な作家の、汽車の窓からどこまでも続く稲田を見て吐き気を催した、という文を見てびっくりしたことがある。青々と広がる田は初夏の日本のすばらしい風景だと思っていたからだ。特に田植えの終ったあとの田は、爽やかでよいものだ。

唯、今は田植え機などができ、楽になつたらしいが、昔は田植えは大変だった。楊万里の「挿秧歌」に、「田夫は秧を抛ち、田婦は接げ、小児は秧を抜き、大児は挿す」とあるように一家総出の大仕事、日暮れまで働かねばならなかった。

それで一日の仕事をやりに終えて家路につく頃には月が上り、田植えを終えたばかりの田圃では盛んに鳴く蛙の声を聞くことになる。しかし、心はほっとしていたことだろう。

しかしこれはもう昔の風景。田圃の消えていく日本を見て、あの作家が生きておられたとしたら、何と言われるだろうか。

梅天偶作

梅天偶作

霏霏霖雨晝冥濛

霏々たる霖雨晝冥濛

檐滴閑聞茅屋中

檐滴閑に聞く茅屋の中

掩卷推窗新竹長

巻を掩い窓を推せば新竹長じ

綠陰深處石榴紅

綠陰深き処石榴紅なり

霏霏 雨がしきりに降るさま 霖雨 長雨 檐滴 のきに降りそそぐ雨の音

大雨は困るが、細かい雨が静かに降る日はよいものだ。もつとも、出かけなければならぬ用事などない、気楽な身だからかもしれないが。あるかなきかの雨音を聞きながら本を読む。飽きれば窓に寄り、庭を眺める。しつとりと雨にぬれた木々の緑は実に美しい。

しかし、やはり何か花がほしい。この望みをかなえてくれるのがザクロ、緑の葉の茂みに点々と見える朱色の花は実に鮮やかだ。

ザクロは日本では余り珍重されていないが、漢詩には「榴花」「石榴」「榴火」などという語でよく登場する。特に有名なのが「万緑叢中紅一点」の句。多くの緑の葉の中にただ一つ赤いザクロの花が咲いている、という意だ。

これは普通、宋の王安石の詩句だと言われているが、実は作者についてはいろいろな説があるらしい。もつとも今では「紅一点」(多くの男性の中に一人女性がまじっているのたとえ)の語のみ独り歩きしているが。

颯風一過

ぐさういっか
颯風一過

早曉始知風雨收

さうきょうはじ
早曉始めて知る風雨の収まるを

曳筇潦水滿田疇

つえ
筇を曳けば潦水田疇に満つ

花飛草亂池塘畔

はなとくさ
花飛び草乱るる池塘の畔

喜看鳧雛浴日游

よろこみ
喜び看る鳧雛の日を浴びて遊ぶを

颯風 台風 潦水 大水

ある年、台風に襲われた。しばらく経験したことのないような強い台風で、激しい風雨の音に、一晚中眠られぬほどであった。しかし翌朝は台風一過、快晴となったのでいつものように散歩に出かけることにした。道には花や葉が飛び散り、折れた木の枝まで散乱しており、田植えのすんだ田圃も、すっかり水に浸かって、苗も倒れ伏したまま。風雨がいかに強かったかを、まざまざと見せつけられる。

森林公園の中にも、あちこちに無惨な爪跡が残っていた。心配しながら池のほとりにたどり着く。そこで思わず喜びの声をあげそうになった。かるがもの親子が、折から射し込んできた日を浴びて泳いでいるではないか。

数えてみると前日の朝と同じく八羽。生まれて間もないまだ黄色い雛達が、母親のあとに一列になって泳いでいる。昨夜はどこであの嵐を避けていたのだろうか。帰りは自然と足取りが軽くなった。

吃荔枝

荔枝を吃す

荔子欲求尋市塵

荔子求めんと欲して市塵を尋ぬ

飛機運到自新鮮

飛機運び到れば自ら新鮮なり

古人難得嶺南顆

古人得ること難き嶺南の顆

今吃遙遙東海邊

今吃す遙々たる東海の辺

菓子 荔枝の実 市塵 店 商店 東海 日本

荔枝というと唐の楊貴妃が好んだこと有名。玄宗皇帝は愛する楊貴妃のために、六百キロも離れた嶺南地方から早馬で長安に運ばせたといい。楊貴妃の悪評の一つである。

又、北宋の蘇軾（号は東坡、グルメで知られ、「東坡肉」を考案したとされる）も、晩年、広東省の惠州に流された際、「荔枝を食す」という詩を作り、「日に啖らう荔枝の三百顆 辞せず長えに嶺南の人と作るを」という詩を作ったほど、荔枝を好んだという。

日本でも、中華の宴会料理などで出されることがあるが、薬臭いような気がして、私は好きではなかった。ところがある中国旅行で広州に行った際、通訳の人が駅近くの露店で荔枝を買い、一行に配ってくれた。気が進まないものの受け取って、食べなくては申しわけないと口に入れた途端、びっくりした。甘く爽やかな味が広がったのである。これは充分熟していたからであろうか。楊貴妃が好んだというのも確かにうなずける味であった。

夏日田家

夏日田家かじりたか

野風清爽雨餘天

野風清爽雨余の天のちかばすつうよのてん

荷耒農人出稻田

耒を荷い農人稲田に出ずつちをにがむのうじんいねのちでい

日午森閑茅舎裡

日午森閑たり茅舎の裡ひちごしんかんたりちやうかのちり

凌霄花下老猫眠

凌霄花下老猫眠るりょうしょうかかろうまうらひ

以前は田植えが済むと、農家の人々は草取りに忙しかった。それで、家中の人が出払い、日中は家の中がひっそりしていたものだった。

この頃人の目をひくのが、「うぜんかずら」の花、中国原産で、節々から気根を出して樹木や壁などに付着してつるを伸ばしてはい上る落葉樹だ。漢名の凌霄花は「霄を凌ぐ花」の意で、はい上がった樹の枝先に橙色のラッパ形の花を数多く開く。

橋本多佳子

松高き限りを凌霄咲きのほる
という句の通りだ。あざやかな花の朱と、緑の草の対称が、多くの俳人たちの関心をひいたようで、

杉田 久女

凌霄花の朱に散り浮く草むらに
など沢山の句が詠まれている。

古くから鑑賞用として庭や公園に植えられているが、一番似合うのは農家の軒先だと思ふ。茅ぶき屋根の軒先の樹にからまって咲いているさまは、同じ夏の花、百日紅（サルスベリ）とは又違った趣がありよいものである。

函山夏雨

函山夏雨かんざんかきり

盛夏蘆湖浮小航

盛夏の蘆湖小航を浮かぶなつかきりあしうみこせうかう

溪雲翻墨似昏黃

溪雲墨を翻えして昏黃に似たりいんげんくろくみづが

跳珠白雨一過後

珠を跳らし白雨一過の後たまをせりし

最好函山空翠粧

最も好し函山空翠の粧ちとよ

白雨 はげしいにわか雨

昏黃 タグレ

空翠

したたるような緑色

漢詩では「函山」とか「函嶺」と言われる箱根の山、東京から近いので、遊びに行くには都合のよい所だ。それでよく知っている地であるはずだが、振り返ってみると、春や秋の箱根はしばしば訪れているが、夏に行った記憶がない。やごとく若い頃、家族と一緒に行ったことを思い出した。

確か妹達の夏休みの時、涼しいはずの箱根も歩くに結構暑かった。美術館などをまわって芦の湖のほとりに着いた時は、午後三時近くであったろうか。

乗船しほっと一息ついていると、雲行きが怪しくなってきた。黒雲が空を覆い出したのである。屋根のある船であるから、雨が降ってもかまわないとはいうものの、あたりが暗くなって景色は見えなくなってしまう。

やがて激しい雨が降り出す。しかし、さすがは夕立、まもなく止んだ。そのあと、雨に洗われた山々の緑の鮮やかだったこと、その中に箱根神社の赤い鳥居が映えていた。

小齋残暑

しょうさいざんしよ

熾日炎風残暑長

しちちえんふうざんしよながし

今茲氣象不尋常

こんじのきしょうふじんじょう

小齋揮汗苦吟處

しょうさいあせをひいてくぎんするところ

聒聒蟬騒心欲狂

かつかつせまわごとこころまよ

熾日 あつい日

炎風 熱風

今茲 今年

聒聒

蟬のやかましく鳴く声

ここ何年か、氣候がおかしい。特に夏の暑さは耐え難く、各地で四十九度近い高温を記録、又いつまでも残暑が続く。もつとも若い頃はあまり汗をかかなかつたのに、今は汗に濡れた衣服を一日に何回も着替えなければならぬから、暑さに弱くなつたのかもしれない。

そういえば、昔は夏の夕方になると雷鳴が轟き、激しい雨が降つたものだ。しかしそれはひと時、すっかり収まると爽やかな気分になれたものだった。あの爽快な夕立はどうしたのだろうか、この頃は滅多にこないようだ。

年寄りには特に熱中症を心配されるので、外出もままならず狭い部屋に籠っていると、余計暑さに耐え難い。詩会の時の締め切りが迫っているので、作らなければと思うのだが、辞書や詩語集を取り出して並べてみても、一句も浮かんでこない。

いらいらしている耳に入るのは、庭の木々で鳴き騒ぐ蟬の声、ますますすいらいらするばかりである。

林亭蟬響

林亭蟬響りんていせんなきょう

城外林亭避暑來

城外の林亭暑を避けて来るじょうがかりんていしよをまきかへてくる

千竿翠竹一庭苔

千竿の翠竹一庭の苔せんさんすいちくいつていのこけ

弄風閑坐聽蟬響

風を弄し閑坐して蟬響を聴くかぜを弄しかんざしてせんなきをきく

自覺聲中秋氣催

自ら覺ゆ声中秋氣催すをみづかしくきこゆるかぜのなかにあきかきまを

林亭 林の中のあずまや 一庭 庭中

蟬せみというと、じりじり太陽の照りつける真夏、やかましく鳴きたてて一層暑さを増すアブラゼミが思い浮かぶ。しかし最近では、この声を聞くことがぐっと少なくなったように思われる。郊外にあるわが家の附近には、樹木の茂る庭のある家もまだ多いのだが。

ものの本によれば、アブラゼミは湿度の高い環境を好むので、ヒートアイランド現象の進行で乾燥化の進む都市部には生息しにくくなったのだそうだ。こうなると、あのうるさかった蟬時雨がなんだか懐かしく思われてくる。人間とは全く勝手なものだ。

先日、湯島聖堂の大成殿の下で、ミンミンという声聞き、思わず足を止めた。鬱蒼とした大樹の間で、一匹のミンミンゼミがしきりに鳴いている。都会の真中なのに街の喧騒は聞こえず、蟬の声だけが境内に響く。じっと耳を傾けて聞いていると、夏の暑さが消え、もう秋の気配が感じられるようであった。

新涼讀書

新涼讀書

幽窗獨坐對燈檠

幽窓獨坐して燈檠に對す

暑熱纔殘涼意盈

暑熱纔かに殘して涼意盈つ

蟲語啾啾草叢裏

蟲語啾々草叢の裏

讀書不覺到深更

書を読み覺えず深更に到る

燈檠 ともし火をかかける台。ともし火

啾啾 虫の鳴く声

若い頃、趣味を尋ねられると、『読書』と答えるのが常だった。他に趣味がなかったせいでもあるが、しかし確かにあの頃は本を読むのが好きであつた。

特に試験前になると、なぜか無性に本が読みたくなるのである。試験勉強をしなければとは重々承知しているのだが、つい小説などに手を伸ばし、読み耽ってしまうのだった。試験の結果が悲惨だったのは言うまでもない。

仕事をしようになると、さすが翌日の仕事に差し支えてはと控えるようになり、徹夜で読み耽ることはしなくなつたが、それだけに読書量はぐつと減つてしまつた。

七十代半ば、介護からも解放され、自由な時間は多くなつたのだが、残念ながら視力、氣力が弱まつてしまつた。読むべき本は沢山あるが、読み通すことが難しくなつた。しかし、陶淵明の「五柳先生伝」にあるように、『甚だしくは解せんことを求めず、氣の向くままに読書を楽しむ』と思ふ。

繪島吟行

えのしまげんぎょう

芙蓉頂雪映朝陽

ふぼうちゆうせう いたちちゆうよう ます

天霽潮風自爽涼

てんせいちゆうふう 自らすずりりやう

俱訪古來名勝島

俱に訪ぬ古來名勝の島

騷人探景滿詩囊

騷人景を探り詩囊を満たす

芙蓉 富士山 騷人 時を作る人

滿詩囊

時を入れる袋をいっぱいにする

神奈川県漢詩連盟では、毎年吟行会を行っている。幸い神奈川県には鎌倉、横浜、小田原など吟行に適した地が多い。この年の吟行会は江の島であった。

石川忠久先生もご参加下さり、総勢四十二名。集合場所で柏梁体の韻字（この時は尤韻）をくじ引きして江の島見学に出発。九月中旬のこの日は海辺のせい也非常に爽やかで、すばらしい上天気。青い海は波が穏やかで、西の空には富士山がくっきりと輝いていた。

江の島神社・展望台などを散策、服部南郭の「題江島石壁」の詩碑を尋ねる。

そして懇親会場で苦心の作の柏梁体一句を提出。例により石川先生が優秀作を選んでくださる。一句選ばれることに、喜んだりため息をついたり。会場は大いに盛りあがった。

四十二名の句が並べられると、江の島や吟行会の様子がよくわかり、吟行会のよい思い出となる。この吟行会への参加者がますますふえてくれることを願っている。

秋晴好日

しゅうせいこうじつ

桂香馥郁好風隨

けいこうふよくこうふうしたがう

日午中庭秋氣宜

にちごちゅうていしゅうきよし

時聽歡聲碧池畔

とききんかんせいはるあざのほとり

幼童投餌戲遊龜

ようどうねをなげしてあそぶかめ

桂香 金木犀のかおり

このホームには池が二つある。大きい方を中池、小さい方を外池と呼んでいる。食堂に面した中池ではずっとかかるがもが雛を育てて、入居者を楽しませてくれたのだが、なぜかここ数年、飛んでは来るのだが、卵を生まなくなり、皆をがっかりさせている。

どちらの池にも錦鯉が放流されており、これも我々の目を楽ませてくれるが、道路に面した外池には十数匹の亀がいる。天気の良い日など、池の真中の石の上に登り、皆同じ方向を向いて甲羅干しをしている様子も面白い。亀はだんだん増えたそうで、石の上のり切れず、落とされってしまうものもある。

近くに幼稚園があり、子供に鯉、特に亀は大人気だ。静かな老人ホームの庭に、元気な声を響かせてくれる。子供達も入居者もパンなどの餌をあげるのを楽しみにしているが、たいてい鯉に奪われて亀の口にはほとんど入らない。食欲な鯉がどんどんメタボになってしまふのが心配である。

敬老院讀古典會

敬老院古典を讀む會

靜閑午下出塵家

靜閑たる午下出塵の家

翁媪俱娛長恨歌

翁媪俱に娛しむ長恨歌

佳句再三高誦處

佳句再三高誦する處

何人獨後一堂和

何人が独り後れて一堂和む

出塵家 俗世界から離れた家

この老人ホームには介護予防委員会というのがあり、「唱歌の会」などを主催しているが、その他居住者を講師とする「日本歴史の会」や「教独の会」なども行っている。

私も頼まれて、毎春秋に、一講座十時間の「古典を楽しむ会」というのを行っている。介護予防には大きな声を出すことが大切ということで、漢詩、それから「万葉集」「伊勢物語」など朗読に適したものを選んでいる。毎回二十名ほどの希望者があり、部屋が小さいので、十名ずつの二組に分かれてもらう。ほとんどの方が八十歳以上だが、皆さんとても熱心、学生時代は戦時中で勉強どころではなかったからと喜んで下さる方も多い。

漢詩で人気があったのはやはり「長恨歌」、とにかく皆で繰り返し大声で読んだ。好きな句を暗誦してしまわれた人もいるようだった。

いろいろ準備をするのが大変だが、やり甲斐があり、私の方も楽しい。お互いに介護を受けなくて済むよう、会を続けられたらと思う。

萬樹秋晴

ばんじゆしゆせうせい
万樹秋晴

静寂林園探勝行

せいじやくりんえんたんしょうぎやう
静寂たる林園勝を探りて行く

紅黃萬樹對秋晴

こうわうばんじゆたいしゆせい
紅黃萬樹秋晴に對す

登臺俯瞰景如錦

だいたふくあんけいじゆしん
台に登り俯瞰すれば景錦の如し

時聽枝梢百舌聲

とききえだせうひやくせつせい
時に聽く枝梢百舌の聲

俯瞰 高い所から見下ろす 百舌 もず

入居したホームの近くには、生田緑地、多摩川、つつじ寺やあじさい寺など、散歩に適したところが多いが、以前から好きであった「神奈川県立東高根森林公園」にも、なんと歩いていかれるようになった。坂道を三十分くらい上っていくと公園の入口に着く。遠足に来た子供達のにぎやかな声が聞こえる時もあるが、大体は静かだ。起伏の多い道をめぐって高台に出ると、園内の様子を見下ろすことができる。

四季いつでもよいが、特に秋の眺めはすばらしい。澄んだ秋空の下、赤く、黄色く色づいた木々が、常緑樹の間に映えている景色は見飽きることはない。紅一色の風景とは、一味違った趣がある。

有名な観光地の鮮やかな紅葉はもちろんすばらしいが、多くの人で混雑することが多い。しかしここなら、しずかに心ゆくまでこの景色を眺めることができる。時々、鋭い百舌の声を聞くことができるのもうれし
い。

多久聖廟釋菜

たくくせいびやうせいかい

楷樹亭々聖廟前

かいていとうせいびやうぜん

鳳笙清韻徹高天

ほうせいせいゆんてつたか

繼承賢主崇文志

けいじょうけんしゅすんぶんし

釋菜盛儀千載傳

せいかいせいぎせんざいでん

釋菜 高くそびえ立つ
文をたつとよ

鳳笙 すぐれたしやうの笛

賢主 ここでは多久茂文のこと

多久聖廟は現存する孔子廟としては最も古いもの一つで、ここで毎年春と秋の二回、釈菜（蔬菜や木の実などを供えて、孔子の遺徳をしのぶ祭）が行われている。

中国、明代の衣裳をまとった祭官、雅楽を奏する伶人は、市長をはじめとして皆、佐賀県・多久市の職員だとか。莊重な楽の流れる中、祭官による供え物がなされ、祝文、全国から寄せられた釈菜への獻詩が読み上げられる。

式典後は廟前において、小学生による「釈菜の舞」、「腰鼓」などが演じられ、見物の人達が拍手喝采。

多久聖廟は学問に関心の深かった四代領主、茂文によって創建され、それ以来三百年以上にわたってこの釈菜が続けられているとか。雅びで奥床しい行事だが、余り知られていないのが残念。幼稚園児でも論語の幾章かを暗誦できるようなすばらしいところが今も存在していることが日本中に広まり、この釈菜の行事がいつまでも続くことを祈っている。

湯島聖堂秋

湯島聖堂の秋

楷樹森森氣爽然

楷樹森々として氣爽然

杏壇講話徹秋天

杏壇の講話秋天に徹る

無風黃葉蕭蕭下

風無くして黃葉蕭々として下り

埋盡溫容聖像邊

埋め尽くす溫容の聖像の辺

森森 樹木が高くそびえるさま 杏壇 孔子の旧居にある講堂の遺跡。後に学問所、講堂のことをいう 蕭蕭 葉がものさびしく散るさま

東京のお茶の水駅近くに、鬱蒼と樹木の繁る一面がある。孔子を祭る湯島聖堂である。ここでは漢学を中心とした数多くの斯文会による文化講座が行われており、私も作詩講座をはじめ幾つかの講座を受講するのを楽しみとしている。

その聖堂への入口、仰高門の正面に大きくそびえているのが楷樹である。中国曲阜の孔子の墓に弟子の子貢が植えたと言われる樹の種子から育てられたものだそうだ。

若葉の頃もよいが、最もすばらしいのは秋、十一月下旬になると黄葉した十種ほどの細い葉が地を埋め尽くしてしまう。澄んだ秋空の下、講堂の講義の音が響くところにしきりに舞い落ちる楷樹の葉、周りの喧騒とは別世界、側の孔子様の像のお顔も和やかに感じられる。

この詩は佐賀県多久市の「全国ふるさと漢詩コンクール」で最優秀賞をいただき、詩碑を建てていただくことができた、私にとって生涯の記念すべき詩である。

先儒展墓

先儒展墓

頌徳歌流秋氣清

頌徳の歌流れて秋氣清し

肅然獻菊碩儒塋

肅然菊を獻ず碩儒の塋

碑前謾謾松風度

碑前謾々松風度る

如聽當年講話聲

聴くが如し當年講話の聲

展墓 墓まいり 頌徳 徳をほめたたえる
謾謾 松風の音の形容 當年 その昔

碩儒 すぐれた学者 塋 墓

豊島岡墓地に隣接する大塚先儒墓所は、江戸時代、昌平坂学問所の教官であつた儒者達が葬られているところ。毎年十月の第四日曜日に、斯文会により先儒祭が行われている。

地下鉄新大塚駅からしばらく歩くと墓所に到着。とても都内とは思えないほど静か、秋もやや深まる頃なので、あたりの気配は澄み渡って清らかだ。

斯文会理事長の祭文奉読、縁ある人の墓前講話、二松学舎大学付属高校の生徒達と共に参会者一同で、「先儒頌徳の歌」を斉唱する。

祭儀後、参会者は先儒の墓前に菊の花を手向けにまわる。寛政の三博士といわれる柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里などの墓前に立つと、学問所で儒学を講じておられた姿が目につかぶ。それにしても、生涯をかけて研鑽された儒学が、今日ほとんど顧みられなくなっている状態を、嘆いておられるのではないか。この先儒祭も、いつまで続くことか、憂えずにはいられない。

過舊居

過つた昔の居る

鳥雀噪庭柴戸壞

鳥雀庭に噪ぎて柴戸壞れ

萬蘿纏牖舊居荒

萬蘿牖に纏わりて旧居荒る

唯看先妣手栽菊

唯看る先妣手すから栽うる菊

籬畔寥寥對夕陽

籬畔寥寥夕陽に對するを

萬葉 ったかずら 籬窓 先妣 亡くなった母

母が亡くなり一人暮らしでは家を維持していくのが大変なので、老人ホームに入居することにした。そのため四十年以上住んできた家を処分した。

夏に引越したあと新居の整理に追われて以前の家のことは忘れていたが、秋になってたまたま近くに用事があり、旧居を訪ねてみた。

すでに売れていたが、古い家はまだ壊されてはいなかった。しかし住む人のいない家の荒れ方はひどかった。雨戸が壊れ、窓ガラスもところどころ割れていた。母が大切にしていた庭も雑草がはびこり、見る影もない。垣根のそばに寄ると、わが物顔に歩きまわっていた雀の群れがあらわてて飛び立っていた。

見るとその垣根のそばに数輪の菊の花が健気に咲いている。これも母が植えたものだろう。菊は強い。何の世話をされなくてもこのように花を咲かせている。小さい身体で、弱々しく見えながら心の強かった母の姿がこの花と重なり、しばらく立ち去り難かった。

展墓焚香

展墓焚香

日淡風寒徑草萎

日淡風寒徑草萎

北邙尋到晚秋時

北邙尋ね到晚秋の時

嘗陪先妣焚香處

嘗て先妣に陪して香を焚きし處

獨弔双親蟋蟀悲

獨り双親を弔えば蟋蟀悲しむ

北邙 墓地 蟋蟀 こおろぎ

八十歳を過ぎてから母はほとんど外出しなくなったが、毎月の墓参だけは欠かさなかった。しかし足が弱り、一人では心配なので、私が付き添って行くことになった。

五つほど先の駅で降りると墓地までは十分ほど。だが母の足では倍はかかる。母に合わせてゆっくり歩くと子供の頃が思い出される。

当時母は私の後に生まれた弟や妹、寝た切りの祖母の世話で忙しかった。その頃の母はいつも洗濯に追われていた。洗濯機などなく戦争中は水道も止められていたので、外の井戸端での洗濯、冬はあかぎれて母の手はいつも血が滲んでいたのを思い出す。このように二人で歩いた覚えはない。その子供時代をとりもどすかのような穏やかな時間だった。

米寿の祝いの後、大腿骨を骨折し車椅子生活となった母は墓参に來られず、私一人の仕事となった。九十五歳で母が亡くなったのは十一月、ひっそりとした霊園で一人香を焚く。母の志を継ぎ、毎月の墓参は続けようと思っている。

初冬偶作

しよとうぐうさく

樹蔭茅軒喧宿禽

じゆいんぼうけんしやくきんかしま

夜來風定月西沈

やらいかぜただりてつきにしず

籬邊採菊驚寒氣

りんべんさいくきょうかんき

曉露濃濃落葉深

あやうらうじやうゆふのふか

茅軒 かやぶきの粗末な家

濃濃 露の多いようす

初冬というところ、「アララギ」の歌人、伊藤左千夫の「ほろびの光」連作の冒頭の歌

降り立ちて今朝の寒さを驚きぬ

露しとしとと柿の落ち葉深く

が浮かんでくる。左千夫晩年の絶唱とされる歌である。

朝、庭に降りてみて、思いがけない寒さに驚く。いつの間にか冬の姿に一変した庭には、柿の落ち葉が深く散り敷き、冷え冷えとした朝露にぬれているというのだが、「ほろびの光」と題されているように、万物が凋落する姿の寂寥感を詠んでいるといわれる歌だ。

ある朝、突如として厳しい寒さを感じ、ああ、もう冬になったのだと感じた経験は何回もある。左千夫の歌にくつつき過ぎてしまうととは思ったが、その時の景をまとめてみた。

寒さがやってきても菊の花は強い。けなげに花を咲かせている。その下には露にぬれた一面の落ち葉。冷え冷えとしてはいるが、心ひきしまる冬の朝の景である。

蓮塘晚歩

蓮塘晚歩

晚來鬱鬱出郊行

晚來鬱鬱として郊に出て行く

停杖池塘凄色横

杖を停むる池塘凄色横たわる

夏日千花競妍處

夏日千花妍を競いし処

水風蕭殺敗荷傾

水風蕭殺として敗荷傾く

蕭殺 ものさびしいこと。殺は強めの意 敗荷 やぶれた蓮の葉

蓮は古来、人々に愛されてきた花である。特に中国では、北宋の周敦頤（字は茂叔）が「愛蓮説」を著わして以来、「花の中の君子」とされて重んじられてきた。そのためか「詩語集」には蓮に関する語が沢山ある。

まず、「芙蓉」「荷花」「藕花」など花の異名の多いのに驚くが、葉にも「翠蓋」「青錢」などの語がある。大きな緑色の葉が水に浮かぶさまは人々の興味をひきつけたようである。「田田」という語ができたのはおもしろい。

さらに、秋になって破れた蓮の葉を、「敗荷」ということを知った。大きな蓮の葉が破れて無残な姿をとどめている荒涼とした冬の景色は、文人達の心をそそったようで、詩に使われるようになったのだ。日本の俳人達も、こういう景にひかれたようで、いろいろな句が作られている。作詩は大変でやめたくなくなることがある。しかしこのようにいろいろな言葉を知る喜びもある。あきらめずに続けたいと思う。

冬夜讀書

冬夜讀書

冬夜凄凄眠不成

冬夜凄々眠り成らず

小齋開卷坐深更

小齋巻を開きて深更に坐す

一燈欲盡擧頭處

一灯尽さんと欲して頭を擧ぐる處

微有打窗新雪聲

微かに有り窓を打つ新雪の声

開巻 書物を開いて読む

このホームは開設されてもう二十数年経ってしまった。初めの頃入居された方はほとんど六十代で、まだ仕事を持っておられた方もあり、海外旅行・クリスマス会なども入居者の企画でされ、活発に活動されていたそうだ。

しかし今は、平均年齢が八十歳を超えてしまい、各種の同好会も人数不足で消滅するものが続出、食堂に來られる人も減ってしまった。夕食は七時半までという規定であるが、昔はおしゃべりが尽きず、七時半を過ぎてもかなりの人が食堂に残っていたそうだ。しかし今は七時を通ざると、もうほとんど人の姿はなく、ひっそりとしてしまう。

皆さん部屋でテレビを見ておられるようだが、近頃のテレビは私にはどうもおもしろくない。それで本でも読もうかとなる。

以前読んだはずの本もすっかり忘れていて、読み出すとついやめられなくなる。昔と違い灯の尽きることもない。翌日のことを心配する必要もなく、本が読めるのは老人の特権であろうか。

燈前聯句

燈前聯句とうぜんれんく

清夜都城一玉堂

清夜の都城一玉堂せいやのとしやういちぎやうどう

鷗盟參集舉杯觴

鷗盟參集し杯觴を舉ぐうめいさんしゅうはいしょうをあぐ

宴酣探韻各聯句

宴酣にして韻を探り各々句を聯ぬえんぱんしていんをさがりおのづからくをれんぬ

燦燦燈前興正長

燦々たる燈前興正に長しさんざんたるとうぜんきやうせいにながし

鷗盟 風雅な交わりの仲間

青山のNHK文化センター、石川忠久先生の「漢詩をつくる」の講座では、毎年新年会を開く。三十名ほどの人が和気藹々とおいししいお酒・食事を楽しみ、会が盛り上がった頃、幹事が袋を持ってまわって来る。

中に入っているのは、ある韻に属する漢字の書かれた札、その中から一枚を抜き、抽いた韻字を末尾に据えて七言の一句を作るのである。すべて異なる漢字が入っているので、やさしい字が当たった人はよいが、難しい字が当たると大変、辞書を引いたり、詩語集を調べたり大騒ぎとなる。なんとか作って短冊に書いて提出すると、石川先生が新年会が始まって盛り上がり終るところまでの順に並べてくださる。その早いこと。韻字が全部違うので同じ句ができることはない。順に並べられた皆の七言一句が読みあげられ、楽しかった会を振り返ることになる。

なんと風雅な遊びであろうか。このような青山詩会がいつまでも続くことを祈っている。

立春喜雪

立春雪を喜ぶ

田園茅屋曉寒加

田園の茅屋曉寒加わる

窗外皚皚飛雪斜

窗外皚々飛雪斜めなり

喜看空庭立春日

喜び見る空庭立春の日

東皇齋到萬枝花

東皇齋し到る万枝の花

雄雉 雪の白いさま 東皇 春の神

立春を過ぎた朝、いつのまにか雨が雪に変わっていた。この辺では雪は立春を過ぎて降ることが多い。幸い今日は外出の予定無し、ゆつくり雪景色を楽しむことにした。

働いていた頃、雪は迷惑なものでしかなかった。交通機関が乱れることが多くからである。実際、途中で電車が止まってしまい、線路上を歩いたこともあった。雪の積った線路は滑りそうで、本当に恐かった。

又、古い一戸建に住んでいた間は雪掻きに悩まされた。年老いた母との二人暮らしでは、私がやらなければならぬ。降り止んで雪が堅くなるが大変。夜中にやったこともあった。それがホームに入居してからは雪掻きなどやらなくてよくなり、子供時代と同じように喜べるようになったのだ。

通りに人の姿はなく、車も滅多に通らない。「前山」と呼んでいる低い丘の木々に、春の神が一面に咲かせてくれた真白な花を、一日飽かず眺めて過ごした。

雪徑看梅

雪徑看梅

一白林園細徑通

一白の林園細徑通す

案詩探景興無窮

詩を案じ景を探れば興窮り無し

鳴禽飛拂枝頭雪

鳴禽飛びて払う枝頭の雪

忽看梅花數點紅

忽ち看る梅花數點の紅

小田急線向ヶ丘遊園駅の近くに、生田緑地という川崎市の公園がある。江戸時代の民家を移築展示する日本民家園、岡本太郎美術館、プラネタリウムのある青少年科学館などのある、緑に囲まれた地だ。その中にある梅園は小さいけれども、私の気に入りの場所である。

奥の池の横の、少々急な階段を上ったところがあり、余り知られていないせいか、いつ行ってもおおむね静かで、有名な梅の名所とは異なり、ゆっくり花を楽しむことができる。

驚くのはこの狭いところに、なんと五十種類もの梅が集められているそうだ。一本一本に「五節の舞」「玉牡丹」「紅千鳥」「楊貴妃」などという名が付けられており、もちろん「白加賀」などの白梅もあるが、紅梅の方が多いようで華やかだ。

雪が降った日、梅園はいつにも増してひっそりしていた。ゆっくり歩いていくと、突如鳥が飛びたち、枝の雪を払った。そこに現われた花の紅色は、一層鮮やかであった。

第二部

客中偶詠

西域曠目

西域曠目

冒曉驅車西域邊

曉を冒し車を駆る西域の辺

荒途寂寞望蒼然

荒途寂寞望み蒼然たり

一天纔白沙場上

一天纔かに白む沙場の上

認得駱駝成隊眠

認め得たり駱駝隊を成して眠るを

■ 目にふれたもの

はじめて敦煌を訪れたのは一九八一年の夏のことであった。敦煌空港は翌年開港ということで、蘭州から汽車、バスを乗り継いで行った。途中、酒泉や嘉峪関などを見学したためでもあるが、七月三十一日の夕刻、蘭州駅を出発して、バスが敦煌に到着したのは八月三日の朝であった。

『莫高窟』の碑が見えた時には、車内から思わず拍手が起こった。

二日間莫高窟などを見学し、五日の朝帰途に、朝四時出発で柳園駅へ。バスはまっ暗な道を進む。ついうとうととしていたところ、突然バスが停まった。皆につられて下りてみてびっくり。夜明けの間の中に駱駝の大群が眠っていたのだ。駱駝は全く声も立てず静か。やがて空は白み始め、何の連るものもなく広がった野の果ても見えるようになり、大自然の懐にすっぱり包まれたような感じになった。

飛行機の旅であつたら、このような感動を味わうことはなかった。この時の光景は中国旅行の中で最も印象深いもの一つである。

垓下

垓下

古蹟尋來日已斜

古蹟尋ね来れば日已に斜めに

涼秋荒野少人過

涼秋の荒野人の過ぐる事少なり

項王霸業空消處

項王の霸業空しく消ゆる處

颯颯風聲似楚歌

颯々たる風聲は楚歌に似たり

覇業 天下を統一する事業

颯颯 風の吹く音

垓下は高校時代に、『四面楚歌』の話を習った時から忘れ難いところとなつた地である。

平成三年の中国旅行行程表に、『垓下』が入っているのを見て楽しみにしていたのに、なんと洪水のために行くことができなかった。

翌年又挑戦、しかし運転手もよく道を知らないらしく、何回も尋ねてやっと到着した時はもう夕暮れであつた。

「何もない所ですよ」という中国人ガイドの言葉通り、一面の綿畑、その中に『垓下遺址』という小さな碑があつた。五年間にわたつて劉邦と覇を争つた項羽は次第に追いつめられ、ここで劉邦軍に包囲される。夜、四方から故郷楚の歌が聞こえてきた時、項羽はもうこれまでと最後の宴を開き、有名な「垓下歌」を作り、寵姫虞美人との別れを惜しむ。虞美人はこのあと自決したと伝えられている。

眼前に広がる荒漠とした綿畑にこのような悲劇の面影は全くない。唯、冷やかな風の音は、哀調を帯びた楚歌のようであつた。

古廟秋風

古廟秋風

野廟尋來暮景迢

野廟尋來暮景迢

悲風吹度古津頭

悲風吹度古津頭

眼光炯炯霸王像

眼光炯炯たる霸王の像

徒望烏江經幾秋

徒らに烏江を望みて幾秋か経たる

遺せまる。近づくと、炯炯するとい様子

烏江近くの「霸王廟」（霸王祠）を訪ねた時、祠の門は堅く閉ざされ、入ることができなかつた。管理人との交渉の末、なんとか入場を許されたのはもう夕暮れに近い頃。荒涼とした地に立つ古祠のまわりに、私たちのグループ以外の姿はなかつた。

祠そのものは小さかつたが、力感にあふれる霸王（項羽）の大きな像には圧倒された。眼は最期の地となつた烏江を、炯々とらんでいるようだった。

城下を脱出した時は八百騎であつたが、最後はわずか二十八騎、それで数千の漢軍に対したのだ。項羽は獅子奮迅の働きをした後、自刎して果てる。その遺体に恩賞目当ての漢の兵士が殺到し、同士討ちをしたという。

項羽の像はあちこちに建てられており、いずれも若々しく凛々しい像だが、これは薄暗い祠内のせいかな、やや愁いを含んだ顔に見える。その像を、冷やかな秋風が蕭々と吹いていた。

湖畔憶石湖居士

こはれまここし
湖畔石湖居士を憶う

盛夏蘇州湖水隈

せいか
盛夏の蘇州湖水の隈

芙蓉綽約映波開

ふきよ
芙蓉綽約波に映じて開く

小舟閑泛萬花裡

しょうせん
小舟閑に泛ぶ萬花の裡

似待詩翁放棹來

まちまち
待つに似たり
詩翁棹を放たんとして来たるを

芙蓉 はすの花
棹 さお。かい

綽約 やさしく美しい様子

詩翁 ここでは石湖居士、つまり范成大を指す

夏の日、念願かなってやっと石湖を訪れることができた。湖の一隅は暑い日ざしに照りつけられ、人の姿はない。しかし、幸いなことに清らかな蓮の花が湖上に咲いていた。

ここは南宋の、陸游や楊万里と並び称される詩人范成大が、政界を退いて隠棲したところ。そして多くの人々に愛されている「四時田園雜興」が生み出された地だ。范成大の号「石湖居士」も、もちろんこの湖に基づく。

暑さも忘れ、佇んでいると「夏日田園雜興」の「千頃芙蓉棹を放ちて嬉む 花深うして路に迷い晚に帰るを忘る」（石湖には見渡すかぎり蓮の花が咲いており、その中に舟を出して楽しむ 余りにも沢山の花に路が分からなくなり、夕方に帰ることができなくなった）という句が浮かんでくる。

改めて湖に目をやると、彼方の花の間に、一そうの小舟が見えた。乗っている人はいない。その様子は、いかにも范成大がcaじを動かして来るのを待っているかのようにであった。

拜杜工部墓

杜工部の墓を拜す

詩聖陵園幽徑通

詩聖の陵園幽徑を通じ

樹陰墳墓對薰風

樹陰の墳墓薰風に對す

生前不遂歸鄉意

生前不遂げず歸郷の意

深悼亡魂飛絮中

深く亡魂を悼む飛絮の中

飛絮 乱れ飛ぶ柳のわた

杜甫の墓は何ヶ所かあるようだが、若い頃住んだという洛陽僱師の墓は、中学校の庭の隅にあった。先祖の杜預（西晋の武将、学者。特に春秋左氏伝の学に精通し、「春秋経伝集解」等の著がある）、祖父、杜審言（初唐、武則天期の官廷詩人）の墓と並んでいる。

四十八歳で、秦州、同谷、成都への旅に出たから、五十九歳で潭州と岳州の間の舟中で亡くなるまで、杜甫はついに故郷に帰る望みを果たすことはできなかった。死後四十三年たって、孫の杜嗣業により岳州に置かれていた柩はやつとここに帰ったのであった（その後更に故郷の鞏県に移葬されたという）。

この日はメーデーで町は賑わっていたが、ここには私達のグループ以外の人の姿はなかった。時折、爆竹の音が響いてくるもののひっそりとしている。白い柳絮が爽やかな五月の風に舞っている。幾年も空しく他郷に遇ごさなければならなかった詩聖の心を思い、墓前を立ち去り難かった。

秋風樓

しゅうふうろう

朽梯纒踏上危樓

くうていじょう たくみて かいろう なる

眼界蕭條生暗愁

がいがい しょうじょう せいあんしゅう

漢武浮船賦辭處

かんぶ ふうせん へいじ ところ

唯看汾水白雲流

ただ みる ぶんすい びやくん の ながる

朽梯 朽ちたはし、階段

危樓 高い樓

汾水 山西省を東北から西南に流れて黄河に入る河

秋風樓は前漢の武帝の「秋風辭」にちなんだ建物。三層からなり、朽ちかけた階段を登るのは大変だった。

武帝は四十四歳の時、后土（土地の神）を祀るためここに行幸した。そして汾河に船を浮かべて遊び、有名な「秋風辭」を作ったといわれる。最上階の欄干にもたれて望むと、昔ながらの質素な家が点在する農村、その先にかすかながら汾河を望むことができた。武帝の豪華な遊びをしのばせるものは何もない。

秋風起りて白雲飛び 草木黄ばみ落ちて雁南に帰る で始まる「秋風辭」、さまざまに歡樂を極めた末、老いの恐れを感じる。最後の「歡樂極まりて哀情多し 少壮幾時ぞ老いを如何せん」の二句は、人々の共感を得、千古の名吟とされている。

確かにこの頃が武帝の絶頂期だったのかもしれない。この句を口ずさみながら、悲惨だった武帝の晩年を思いやつた。

函關古道

かんくわんこどう

要害函關遠訪尋

要害の函關遠く訪尋す

舊蹊遙續晝森森

旧蹊遙かに続き晝森森

往年壯士向都處

往年壯士都に向かう處

唯看碑邊春草深

唯だ看る碑邊春草の深きを

要害 地勢がけわしく、敵を防ぐのに重要な所

函關 函谷関の略

壯士 氣力さかな男

鬱蒼と茂る樹木に陽光をさえぎられて昼なお暗い崖の下に、細い道が遠くまで続く。人影は全くなく、森閑としている。
「函關古道」という碑のわきにたたずんでいると、ここを通ったであろう歴史上のさまざまな人の姿が浮かんでくる。

なかでも強く心に残っているのが「史記」刺客伝の荆軻だ。燕の太子・丹のために秦王（後の秦の始皇帝）を暗殺する刺客となった人である。秦へ赴く荆軻が太子・丹などとの別れに際し詠じた「易水の歌」、
「風蕭々として易水寒し 壯士ひとたび去りて復た還らず」という歌は有名である。荆軻は死を決してこの道を歩いて行ったのだ。この暗く、長い道で、どのような思いが去来したのだろうか。

結局、荆軻は秦王に会うことはできなかったが、暗殺に失敗、殺された。

小さな石碑の他、遺跡を示すものはない。却って思いをめぐらすのによかった。

昭明太子讀書臺

昭明太子讀書臺

石磴半崩蒼蘚生

石磴半ば崩れて蒼蘚生ず

當年臺址自傷情

當年の台址自ら情を傷ましむ

昭明太子讀書處

昭明太子讀書せし處

樹上唯聞黃鳥鳴

樹上唯聞く黃鳥の鳴くを

石磴 石段 蒼蘚 青々とした苔 當年 往年。その昔 黃鳥 高麗うぐいす

昭明太子とは南朝梁の武帝の長子、蕭統。學問に優れ藏書は三万巻に近かったという。残念なことに父・武帝より早く三十一歳で亡くなった。

太子編纂の「文選」は、古代から梁までの文章や詩賦を集めたもの。唐、宋以降科擧の受験者に詩文の模範とされて重視されてきた。日本でも平安時代からよく読まれてきた書物である。

この江南の旅で楽しみにしていたものの一つが、この読書台であった。しかし、崩れかけた石段を登ったところには、ガランとしたあずまや風の小さな建物があるだけで、読書台らしい雰囲気など全くない。

唯、あたりには高い木々が鬱蒼と茂っており、その樹の枝上で黄鳥が盛んに鳴いていた。その声を聞いているうちに、昭明太子の姿が彷彿としてくるように思われる。緑陰深き処にひっそりと立つ読書台、確かに俗塵を離れた別天地であった。

周莊舟行

しゅうせうしゅうこう

明清莊裏水周流

めいしんせうりすいしゅうりゅう

白壁商家連岸頭

はくへきしょうかぜんがしづ

蕩槳青青垂柳下

たうさうせいせいすいりゅうか

棹歌緩緩慰羈愁

せうかかんかんゐんきしう

周流 めぐり流れる 棹歌 ふなうた 羈愁 旅の物思い

周莊は上海の西にある江南水郷第一の名勝。莊内を走る運河には、元・明・清代に建造された古い橋がいくつも残っており、運河の兩岸には白壁の商家が連なっていた。超近代的な上海の近くに、このような古鎮が残っているとは、びつくりした。

やはり明・清代に建てられた住宅の多く残る街を見学し、古雅な店で昼食を楽しんだ後、遊覧船の乗り場へと向かう。観光客が多くものすごい混雑。中国の人達にも人気の高い観光地なのだ。

かなり並んだあと、やっと六人乗りの手漕ぎ舟に乗りこむ。兩岸には柳が青々とした枝を垂れ、初夏の爽やかな風に揺れている。その下を舟はゆつくりと進み、双橋、富安橋などの橋を過ぎる。やがて船頭さんがよい声で、中国の民謡(?)を歌ってくれた。

そのゆつくりとした歌を聞いていると、一週間の旅の疲れがすっかり洗い流され、よい旅ができたことをうれしく思った。

楊升菴祠

楊升菴祠

少小登科舉大名

少小登科大名を擧ぐ

卒然坐罪遠南征

卒然罪に坐し遠く南征す

終身卻好勤文事

終身却つて好し文事に勤しむ

山下祠堂氣色清

山下の祠堂氣色清し

少小 年少、年の若いこと 登科 科擧（官吏登用試験）に合格する 大名 名聲
卒然 にわかに。突然 文事 學問・芸術・教育などに関する事がら

楊慎、字は用修、升菴は号である。明代の人、殿試で第一位となり、政界での活躍を期待される人物であった。

しかし、正徳帝に子がなかったため、従弟の嘉靖帝が即位、楊慎の父、楊廷和らは嘉靖帝は正徳帝を兄とし、正徳帝の生父母を父母とし、嘉靖帝の生父母は叔父母関係とすべきであるという論を奉った（「大礼の議」と呼ばれる）。

嘉靖帝はこれを喜ばず、楊廷和らは罰せられる。息子の楊慎も庶民とされ、雲南の地に流され、三十年余りを過した。嘉靖帝の怒りは深く、亡くなるまで許されなかったのだ。

しかし楊慎はこの地で講学と著述に従い、三千巻に近い著述を残した。楊升菴祠はこじんまりとしているが、歴史、地理、文学などさまざまな分野の研究の成果が展示されている。深緑の木々に覆われた静かな祠の中で、政界での活躍の道は断たれても、文事に一生を捧げた偉人の事績をたどり、改めて人の生き方を考えさせられた。

過少陵

少陵に過る

許后温恭盡婦功

許后温恭婦功を尽くす

何圖薄命聖恩空

何ぞ図らん薄命にして聖恩空し

古陵悵望思遺恨

古陵悵望し遺恨を思ふ

春鳥哀鳴絲雨中

春鳥哀鳴す絲雨の中

温恭 おだやかでつつしみ深い
悵望 悲しい気持ちでながめる

婦功 妻としてなすべき仕事 聖恩 天子のおめぐみ

西安郊外の東南に前漢宣帝・劉詢の陵墓、杜陵がある。少し離れたところにあるやや小さい陵墓が宣帝の皇后、許平君の少陵である。

宣帝は武帝の曾孫、祖父劉攬の乱により庶民とされて民間で成長し、許広漢の娘、平君と結婚した。

ところが武帝の後を継いだ昭帝はわずか二十歳で亡くなり、まだ子がなかった。それで思いがけなく劉詢が皇帝となり、平君は女性最高位の皇后となった。

しかし平君は皇后になってわずか三年、お産で亡くなった。実は自分の娘を皇后にしたいと思つた大司馬大將軍、霍光の夫人が医者淳于衍に毒薬を盛らせたのだという。

この数奇な女性を知つて以来、一度少陵を訪ねたいと思つていた。青草が茂る原にぼつんと立つ陵、我々のグループを除いて人影はない。皇后とならなければ貧しくとも安らかな人生を過ごせたかもしれない。傘をさすほどではない細かな雨が、悲愁をかきたてた。

車上歡談

車上歡談

遙尋禹域喜盈胸

遙かに禹域を尋ぬれば
喜び胸に盈つ

柳暗花明麥隴風

柳暗花明麥隴の風

賞景賞詩師與友

景を賞し詩を賞す師と友と

歡談無盡客車中

歡談尽くる無し客車の中

馬場 中国の別名 客車 旅人の乗る車

石川忠久先生の「漢詩愛好家訪中団」に参加させていただいたのは、平成十年、第十五次「河西青海行」からであった。この時は烏鞘嶺・天梯山・青海湖等、訪ねた場所もすばらしかったが、特に感動したのは、旅行団の雰囲気であった。

ほとんどが詩会の仲間ということで和気藹々、バスの中では、先生の見学場所に関する漢詩のお話を伺うことができた。そして柏梁体、作詩を始めて日の浅かった私には初めての経験で戸惑ったが、皆に助けられて一句まとめてほっとした。翌日は先生が車中で皆の句を見学した順に並べかえて発表して下さる。なんと風雅な遊びがあるものかと驚嘆した。翌年、母の介護をしなければならなくなり、参加することはできなくなった。母が亡くなって六回参加させていただいたが、残念なことに平成二十六年、三十回目でこの旅行はおしまいになった。他の旅行団では味わえない楽しい旅をさせていただき、深く感謝している。

羽州名月莊観月

羽州名月莊観月うしゅうめいげつざうかんげつ

高閣開筵鷗鷺盟

高閣筵を開く鷗鷺の盟こうかくぜんを開くおうれうの盟

芳醇珍膳晚涼清

芳醇珍膳晚涼清ほうじゆんぜんぜんばんりやうせい

玲瓏山上中秋月

玲瓏たり山上中秋の月れいろうたりさんじやうちゆうの月

添興冷冷玉笛聲

興を添う冷々たる玉笛の聲きようをそえれいれいたるたまふエのこゑ

羽州 山形県

鷗鷺盟

詩を作る風雅な人の集まり

芳醇 うまい酒

冷々冷

音の清らかなこと

神漢連初心者講座四期生の「詩游会」は、盛んに吟行会を催され、活発に活動しておられる。私も平成二十五年九月、山形の上山温泉への吟行会に参加させていただいた。

まず斎藤茂吉記念館へ。偉大な歌人の業績を参観したあと、目的地「名月荘」に到着。

落着いた和風の宿で、蔵王山を目の前に望む部屋で宴会。部屋に集まると間もなく十五夜の月が山上に顔を出し、歓声が挙がる。

山形の名酒、数々の手のこんだお料理を味わいながら、詩吟をされる方が多いので、次々と披露される吟に酔う。

食事を堪能したあと、この宿の売り物である「月見台」へ。すっかり暮れ切った蔵王の上に皎々と輝く明月。確かに「名月荘」の名にふさわしい。

うっとり眺めているところに流れてきたのが「荒城の月」。ハーモニカを持参された方がおられたのだ。清らかな月光の下、劉曉たる響き、忘れられないすばらしい夜となった。

尋武田氏末裔隱棲地

武田氏末裔隱棲の地を尋ぬ

細徑纒通地自偏

細徑纒かに通じ地自ら偏なり

兩三舊屋碧峰前

兩三の旧屋碧峰の前

田翁把劍語先世

田翁劍を把り先世を語る

髣髴桃源辟亂賢

髣髴す桃源乱を辟くる賢

末裔 子孫 先世 祖先

以前、京王電鉄の「京王文化探訪」の「青梅の武田のかくれ里を訪ねて」という催しに参加した。

一月末だったが暖かい日で、八王子駅からバスでかくれ里「栗平」へ。郵便受けの備えられた門のところまでタクシーに分乗。五分以上走ったであろうか、やっと数軒の家が見えてきた（この人は郵便物をあの門のところに取りに行くのか、まず驚いた）。

小高い丘に囲まれた土地に現代を思わせる建築物はなく全く静か。畑ではあちこちに黄色い柚子の実が日に映えている。

三十年前までは六軒だったが今は三軒、その一軒の家を見せていただく。廊下はみがきこまれた松の板、座敷は十五畳ほどの広さで青銅製の鏡などが飾ってある。長押しには花菱の金具、屋根には武田菱がはめ込まれている。

上品な老人が由緒あり気な刀を握って武田家の先祖の話をされると、まさにあの桃源郷の人ではないかと思われた。

過日野俊基墓

日野俊基の墓に過る

傷時憂國抱深謀

時を傷み國を憂えて深謀を抱く

一世辛酸志不酬

一世辛酸志不酬

今日古碑叢莽裏

今日古碑叢莽裏

凄風颯颯使人愁

凄風颯颯々人をして愁えしむ

叢莽 草むら

鎌倉の源氏山公園、葛原岡神社の近く、鬱蒼とした樹陰に日野俊基の墓がある。

日野俊基は鎌倉末期、後醍醐天皇に仕え、鎌倉幕府討幕の謀議に加わった人。諸國を巡り反幕府勢力を募るが、六波羅探題に察知される。一度は処刑を免れたが、二度目の討幕計画・元弘の乱で再び捕えられ、鎌倉へ送られる。この時の京から鎌倉への旅を、技巧を凝らして述べた『太平記』の道行き文は有名である。

鎌倉に着くと、謀叛の張本人ということで、すぐにここ葛原岡で斬首された。

秋を待たで葛原岡に消ゆる身の
露のうらみや世に残らむ

という辞世の歌を残したという。

嘗て訪ねた墓の付近は、人影もなくひっそりした場所であった。しかし今、俊基を祭った葛原岡神社（明治になって創建された神社）は縁結びの神として、若い女性達の人気のパワースポットになっているという。一体何人が俊基の名を知っていることだろうか。

隱岐行宮
後鳥羽上皇

隱岐行宮 後鳥羽上皇

滄海茫茫隔帝城

滄海茫茫帝城を隔つ

絶無雅韻送殘生

絶えて雅韻無く殘生を送る

終宵孤島行宮裏

終宵孤島行宮の裏

唯聽波濤打岸聲

唯聽く波濤岸を打つ声

行宮 天子のかりの御所 雅韻 風流な音楽の調へ

隱岐の島前は賑やかな島後と異なり、人の姿も少なく寂びれた島であった。そこにひっそりと隱岐神社があった。八十二代・後鳥羽上皇が祀られている神社である。

承久三年、承久の乱で北条氏に敗れた上皇は出家をし、この島に流謫の身となられた。それから約二十年、六十歳で崩御されるまで、この島で過ごされたのだった。

都から遠く離れた島、今でさえ寂しいのだから、八百年前の上皇にとつてはいかに侘しく感じられたことであろう。都にあつては常に親しんでおられただろう管絃の音など、全く無縁の地である。江州司馬に左遷された白樂天が詠んだ「琵琶行」の「潯陽は地偏にして音楽無く 終歲聞かず糸竹の声」などの句が思い浮かぶ。

上皇が眠られぬ夜々、聞かれたであろう荒々しい波の音のする浜辺を歩きながら、わずか四歳で帝位につかれ、王政復古の願いをかなえることができなかった無念を思いやつた。

菅茶山墓

菅茶山の墓

村郊寂寂淡煙籠

村郊寂々として淡煙籠む

扶杖登來林壑中

杖に扶けられて登り来る林壑の中

備後先賢長臥處

備後の先賢長臥せる処

漫思偉業立清風

漫ろに偉業を思ひて清風に立つ

林壑 山林の奥深いところ 長臥 長く眠る

備後国（広島県東部）の神辺を訪れたのは春先のまだ寒い日であった。急な細い道を上って墓前に辿り着いた時は、もう夕暮れに近かった。深閑とした墓所にたたずみ、先ほど參觀したばかりの廉塾（私塾として開いた時は「黄葉夕陽村舎」という名であったが、後に福山藩の郷校となつて「廉塾」と改められた）で、三十四歳から八十歳で亡くなるまで、子弟の教育にあたつてきた姿をしのんだ。

江戸時代、学問が広がったのは、菅茶山、少し遅れて出た広瀬淡窓（私塾「桂林荘」、後の「咸宜園」）等の開いた私塾の力が大きかったのだ。又、その名を慕つて学びたいと願う者が全国から集まったともいう。そして儒学だけでなく、すぐれた詩人であった師の薫陶を受けて、江戸時代後期は漢詩の最盛期を迎えることができたのだ。四回ほど江戸などへの大旅行で神辺を離れるが、ほとんど郷里で過ごしながらかつた業績を残した生涯、もつと広く知らせたいものである。

悼中野逍遙

中野逍遙を悼む

未迎三十蕙蘭萎

未だ三十を迎えずして蕙蘭萎ゆ

餘得清新錦繡詩

余し得たり清新なる錦繡の詩

寂寂墓前追想處

寂々たる墓前追想する処

雪花時舞轉添悲

雪花時に舞いて転た悲しみを添う

蕙蘭 香草。蘭の一種。ここでは中野逍遙をたとえる

錦繡 美しい

宇和島市和霊公園で、中野逍遙の詩碑「道情」(擲我百年命、換君一片情、仙階人不见、唯聽玉琴声)を見学してから、墓のある光圀寺へと向かった。

宇和島出身の中野逍遙は、慶応三年の生まれ。幼時から漢籍を学び、東京大学第一回の卒業生、同窓に夏目漱石、正岡子規等がいた。明治二十七年秋、卒業後わずか二ヶ月、二十八歳で病没。しかし、漢詩に恋愛感情を自由奔放に歌いこむ詩風は、島崎藤村など多くの人に影響を与えた。藤村の第一詩集「若菜集」には、逍遙を悼む「哀歌」が収められている。

神田川沿いの細い道を歩いていくと、こちんまりした光圀寺に着いた。本堂の横手の墓地の一角に逍遙のお墓はあった。いよいよこれから活躍しようという時に病魔に侵され、どんなに無念であったろうか。三月初めのこの日は天候が定まらず、時々雪が舞った。この逍遙の名が、広く伝わることを念じつつ、ひっそりとした墓前で、詩人をしのんだ。

第三部

詩會題詠

人日郊行

じんじつこう
人日郊行

雪解天晴暖意加

ゆきとてんはだんば
雪解け天晴れ暖意加わる

輕風習習鳥聲諠

けいふうしゅうしゅう
輕風習々鳥聲諠し

春衣兒女摘蔬處

しゅんいごんにょ
春衣の兒女蔬を摘む處

郊野方開五彩花

こうやまき
郊野方に開く五彩の花

人日 陰曆の正月七日。七草がゆを食べる日。人日・上巳・端午・七夕・重陽の五節句の一つ

中国では古来、人日（二月七日）に七種類の野菜を入れた羹（あつもの）を食べる習慣があり、これが日本に伝わったらしい。日本では「枕草子」に「七日、雪まのわかなつみ」とあるように、平安時代には宮中でも七種粥が食べられていたようだ。

今、セリ・ナスナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの七種を野で集めることは難しいが、昔はかなりの種類を摘むことができたのであろう。

私も子供時代にはよく摘み草をしたものだが、その楽しかったこと、今も忘れられない。まして普段は家の奥で過ごしていたであろう昔の女性たちは、きっとこの摘み草の日を待ちこがれていたことであらう。

思い思いの春着を着て、雪も解け、鳥のさえずりの聞こえる野で、仲間とおしゃべりしながら摘み草を楽しむ。その野は若い女性たちの華やかな衣裳で、五彩の花が咲いたように見えたにちがいない。

春舎酣眠

しんしやしみみ
春舎酣眠

鶯語關關春氣舒

うぐわんかんしんきのお
鶯語関々春氣舒ぶ

簷梅映日老儒居

えんばいりやうじゆ
簷梅日に映ずる老儒の居

午餘酣睡香風裡

ごよゆうすいかうふうのら
午余酣睡す香風の裡

不識飛花貼古書

しらずひはなのおきよ
識らず飛花の古書に貼するを

團圓 くつすり眠る。酣睡も同じ

團圓 なごやかに鳴く鳥の声の形容

この題を見た時、晚唐、薛能の「老圃堂」の詩が浮かんで来た。転・
結句が「昨日春風不在を欺き、床に就いて吹き落とす読残の書（昨日は
春風が私の留守をいいことに、寢床から読みかけの本を吹き落としたり）」
という時、この最後の句のような詩を作りたかった。

窓の外には鶯の声が聞こえ、簷近くに梅の木のある静かな住まいを設
定し、主人公は年老いた儒者としてみた。

何回も挑戦するものの科挙に合格せず、村の子供達に四書などの手は
どきをしている人物。子供達の前では姿勢を崩すことなく、端然として
笑顔など見せることのない謹厳で恐い先生。それが暖かく気持ちのよい
春の午後に、つい読書を忘れぐつすりと寝こんでしまっている。そこに
梅の花びらが飛んできて、大切な本の上に落ちたという詩にしてみた。

俗世間から遠ざかった人の住まいの、のどかな春日の一場面がわかっ
ていただけたらうれしい。

東海道中

東海道中

郵亭窗外大湖平

郵亭の窓外大湖平かに

北嶺峨峨晚照明

北嶺峨々として晚照明らかなり

一路春風東海道

一路春風東海道

明朝應看洛中櫻

明朝応に看るべし洛中の桜

郵亭 宿場の旅館

大湖

ここでは琵琶湖

峨峨

山の高くけわしいさま

現在は東京から新幹線のものぞみに乗れば、二時間十五分くらいで京都に着いてしまうが、江戸時代はそうはいかなかった。江戸から京都まで大体十五日くらいかけて歩いたらしい。

この時代にはお伊勢参りなど、旅が盛んになってきたらしいが、旅をするというのはまだまだ特別なこと、情報も発達していなかったから未知の世界に会える旅の喜びは、現代とは比べものにならないくらい大きかっただろう。

辛いこともあったろうが、「一路春風」と天候に恵まれた旅にしてみた。そしてとうとう、東海道五十三次の最後の宿場大津に到着。

眼前に広々とした琵琶湖の眺められる宿に泊まり、明日はとうとう見ることが出来る都の様子に思いを馳せる。物事は実現した後よりも、その前の方がよけいワクワクするものだ。季節も桜が満開となる美しい時、華やかな都の様子を思い、興奮してなかなか眠れなかったであろう昔の旅人の様子を想像してみた。

詠白牡丹

白牡丹を詠ず

麗日蕭條書屋中

麗日蕭條たり書屋の中

花王一朵映窗櫺

花王一朵窓櫺に映ず

瓶前端坐凝眸看

瓶前端坐し眸を凝らして看れば

潔白清容含淺紅

潔白の清容淺紅を含む

窗櫺 れんじ窓 端坐 正しく坐る。きちんと坐る

牡丹は中国で隋、唐以来愛されてきた花。豪華な大輪の花は、確かに繁栄を誇った盛唐時代にふさわしく、この時代に宮中や貴族の屋敷の庭園で盛んに栽培されるようになった。

さらに次の宋代になると、洛陽や蘇州などの富裕な都市の住民にも広く愛されるようになり、「花王」という別名も生まれた。そしてさまざまな色の牡丹が作り出され、それらの花は作り出した園芸家の姓を冠して、「姚黄」とか「魏紫」などと呼ばれたそうだ。

どの色の花もそれぞれすばらしいが、私が一番好きなのは白牡丹、そして白牡丹と言えば思い出されるのが高浜虚子の

白牡丹といふといへども紅ほのか

という、客観写生の代表とされる句である。清閑とした部屋の中、ひとり端坐して白牡丹を凝視する虚子の姿が浮かんでくる。

ただ、十七字の俳句を漢詩に詠むのは難しい。この詩も何回も再提出し、直していただいた。苦勞しただけに捨て難い詩である。

黛玉送春

黛玉たいてい春はるを送る

雨後閑庭翠色勻

雨う後ごの閑庭かんてい翠色さいしき勻ひと

千紅委地露珠新

千紅せんこう地ちに委いして露珠るしゆ新あらたなり

池邊綽約多情女

池邊ちべん綽約ちやくやくたる多情たじやうじゆの女

懇葬落花獨送春

懇おんごろに落花らつつかを葬ほうらひ独ひとり春はるを送る

綽約 なよやかで美しい

「紅樓夢」は中国清の乾隆帝時代に書かれた長編小説。玉を口に含んで生まれた賈宝玉は、当時重んじられた科擧の勉学を嫌い、詩や「西廂記」などの戯曲に興味を示す貴公子。

宝玉の姉、元春は貴妃となり、その里帰りのため買家は広大な庭園、大観園を造営。その後宝玉や姉妹達がこの園に住み、風雅な交流をしたり詩を作ったりした。

宝玉がもつとも魅かれていたのは林黛玉。幼くして両親と死に別れ、母方の実家買家にひきとられ、宝玉と一緒に育てられてきた。

黛玉は頭がよく、詩才に富んでいた。病弱で繊細、早く両親を亡くしたためか厭世的で、感受性の強い美少女。この日も以前桃の花を埋める花塚を作った築山のところで、長い詩を作り独り泣いて春を送っていた。それを宝玉が耳にし、儂おれ今花を葬らば人は痴ちと笑うも 他年儂を葬るは知んぬ是れ誰ぞ……の句にやはり泣きくずれる。「紅樓夢」中、私の好きな場面である。

樹陰對酌

樹陰對酌

首夏山居氣色清

首夏の山居氣色清し

無端有友叩柴荆

端無くも友の柴荆を叩く有り

野蔬家釀樹陰酌

野蔬家釀樹陰に酌めば

添興枝頭禽鳥聲

興を添う枝頭禽鳥の声

無端 おもいもよらず

柴荆 柴の戸。粗末な家

詩会では、『酒』に関する題が出されることがよくある。體質的に酒の飲めない私にとっては辛い題である。飲むと必ず後で苦しくなるのだ。お酒で盛り上がっておられる人達を見ると、羨ましくてしかたがないのだが。

お酒と詩人と言えはまず浮かぶのが李白、そして「山中對酌」の詩である。それで私も、『山居』と山の中のこととし、やはり気の合った人と向かい合つて飲むのがよいだろうと、友人がはるばる訪ねて来てくれたことにした。

続いて思い出したのが杜甫の、浣花草堂に客を迎えて喜ぶ様子をうたった「客至」の詩。その類聯、『盤城市遠くして兼味（二種以上の御馳走）無く樽酒家食にして只だ旧醅（古いどぶろく）あり』にならない、『野蔬』、『家釀』の語を使ってみた。

かくて大詩人方のおかげで、お酒の味の方から自分も、なんとか一首をまとめることができ、ほっとした次第である。

徒居偶作

徒居偶作

新結草廬幽澗潄

新たに草廬を結ぶ幽澗の潄

摘蔬垂釣興方深

蔬を摘み釣を垂れて興方に深し

最佳窗下清流響

最も佳し窓下清流の響き

日夜潺湲洗我心

日夜潺湲我が心を洗う

幽澗 静かな谷川 潺湲 浅い水の流れる音。さらさら

「ここは月を出さない方がよい」、「でもこの日は月がきれいだったんです」。作詩講座の教室で、講師と詩を作り始めた受講生の間でよく見られるやりとりである。どうも私達は事実を述べなければならぬという考えにとらわれがちだが、作詩はもつと自由にやってみようのだ。

この時も事実を述べたものではない。たまたま長年住んでいた家を処分して老人ホームに入居した時、安全で便利ではあるものこのこと正反対の、山奥にひっそりと住んだ昔の隠者の暮らしを想像して作ったものである。

水が好きなので場所を谷川のほとりとし、野の草を摘み、釣を楽しむこととした。中心となるのは澄んだ谷川、一日中谷川の清流の響きがかかる家とした。このような暮らしをすることは現実にはあり得ないが、「老子」の「上善は水の若し、水善く万物を利して争はず……」という語を忘れずに、残された日々を穏やかに過ごしたいものだと思っている。

山居訪友

山居訪友

尋到鬱蒼幽澗阿

尋ね到る鬱蒼たる幽澗の阿

樵蹊盡處故人家

樵蹊尽くる処故人の家

深閑虛室見何物

深閑たる虚室何物をか見る

一朵瓶裏梔子花

一朵瓶裏梔子の花

阿入りこんだ所。すみ

樵蹊 きこりの通う小みち

虚室 何もないがらんとした部屋

この友人は俗世間から遠く離れた山の中に住んでいる。多分、清貧の生活をしていることだろう。そのような人の住まいにふさわしいものは何か、梔子花（くちなしの花）ならよいのではないか。尋ねていくと、何もない部屋に、清らかな白いくちなしの花だけが活けられていることにしようと考えた。

ところが、転・結句がうまくいかない。転句の下三字は「一瓶裏」か「花瓶裏」としたいが、「一」も「花」も結句と重なるので使うわけにいかない。詩語集にある「銀瓶」ではこの家にふさわしくない。又結句も「一朵清妍梔子花」としてみたが、「清妍」は、どうもしっくりしない。

しかし期限が迫り、「深閑虚室瓷瓶裏 一朵清妍梔子花」で提出した。

しかし石川先生はたちまち、「瓷瓶裏」は「見何物」、「清妍」は「瓶裏」と添削してくださいました。おかげでこの詩は格段によくなった。すばらしい先生に出会えた幸せを改めて感じたことであつた。

遠尋隱士

遠くとほく隱士いんしを尋ぬ

欲訪幽人入碧山

幽人ゆうじんを訪ねんと欲し碧山へきざんに入れば

溪風清爽水潺湲

溪風清爽けいふうせいすう水潺湲みづせんげん

羊腸苔徑將窮處

羊腸ようちようたる苔徑たいけい將に窮きままらんとする處ところ

始見柴門雲樹間

始めて見る柴門さいもん雲樹うんじゆの間

幽人 世を避けてかくれている人。隱者・隱士
雲樹 雲にかかるほど高い木

羊腸 山路が曲がつつかわしいこと

隱者には「大隱」「小隱」、更に「中隱」があるという。「大隱」とは山林などに隠れ住むことはせず、民衆の中で生活しながら世の中から逃れ隠れている人。「小陰」は世の中を厭い、山の中に隠れ住む人だそう
だ。

さて、この詩の題は「遠く隱士を尋ぬ」だから、もちろん小隱であろう。都から遠く離れた山の中に住む人を尋ねて行くのだ。文人画などを書き浮かべながら作ってみた。

山中には清らかな谷川がさらさらと流れており、風は爽やか。曲がりくねった細い道が尽きるかと思われるところで、はじめて高くそびえる木々の間に、隱者の住む粗末な門が見えたとしてみた。

ところで「中隱」とは白樂天が、晩年の自分の生き方を名づけた語。長い官僚生活のあと、洛陽で名譽職につき、出仕するわけでも隠退するわけでもなく、俸給をもらって悠々自適の生活をしたが、それを「中隱」というそうだ。羨ましい生き方をしたものだ。

秋夜思郷

しやちやちやを思ふ

半夜山郵涼氣加

はんやの山郵涼氣加わる

蟲聲唧唧坐思家

虫声唧唧坐るに家を思ふ

如今應看西郊畔

如今應に看るべし西郊の畔

月下皚皚蕎麥花

月下皚皚たる蕎麥の花

山郵 山の旅館

唧唧

虫がしきりに鳴く声の形容

埼玉県日高市の巾着田は、彼岸花の群生地として有名である。一度見てみたいと思つてゐた願いが叶い、ある年の秋、やっと訪れることができた。

しかし有名になり過ぎたせいか、大勢の人で大混雑、おまけにその夏は暑かつたせいも、もうかなりの花がすがれてゐた。がっかりして帰途に着いたが、そのツアーはもう一ヶ所周ることになつてゐた。

そこへ到着したのはもう日も沈み、かなり薄暗くなつた頃であつたが、眼前に広がる蕎麥畑に目を見張つた。人影のない広々とした畑、そこに真っ白な花が一面に咲いてゐたのだ。清らかな小さな花は、夕風にかすかに揺れている。そして、まだ暮れ切つてはいない空には、細い三日月が出てゐた。

今の私に故郷と呼べる地はない。しかし、もしあるとしたら、このよくな場所であつてほしい。そのような思いを込めて、この詩を詠んでみた。

秋山曉景

しやうざまやけい
秋山曉景

早曉空山秋氣加

はやあけぞらざんしゆきか
早曉の空山秋氣加わる

冥濛細徑繞溪斜

みやうもうほろぢやうまがた
冥濛たる細徑溪を繞りて斜めなり

霧中相遇負薪女

きりちゆうあいはらふしやうにょ
霧中相遇う薪を負う女

背上鮮妍桔梗花

はせいせんげんききやうはな
背上鮮妍たり桔梗の花

空山 人けのない寂しい山 冥濛 うすぐらい

残念ながら画家の名は忘れてしまったが、私の心に残っている一枚の絵がある。早朝の山道を一人行く、頭に薪を載せた大原女を描いた絵だ。紺色の筒袖の着物に赤いたすき、頭から垂らした白い手ぬぐいと、独特の服装で、比叡山の麓の大原から、薪や炭、野菜などを京の町に売りに来る行商の女。長く京都の風物詩として親しまれてきたが、昭和三十年代初め頃には姿を消してしまつたらしい。

朝もやのたちこめる道を一人歩く、紺・赤・白の色彩やかな出で立ちの女、数多くある大原女の絵の中でも、最も印象深い。

大原は、文徳天皇の第一皇子・惟喬親王が、藤原氏のため皇位に就くことができず、失意のまま出家して隠棲された地であり、壇の浦で平家一門滅亡の後、生き残つた建礼門院が出家して、安徳天皇や一門の菩提を弔つた場所、冷え冷えとした秋の早朝に似つかわしい場所だとも思う。

秋夜聽雨

しゅうやあめをきく

半宵寂寂一燈微

はんしゅうじやくじやくいちとうび

窗下密縫遊子衣

まどしたひそぬいあそびものころも

獨守家居已三年

ひとりかみを守り已に三年

空聞秋雨思依依

あざしくあきあめをきこむおもひいひたり

半宵よなか 依依 思いたうさま

「聞怨詩」というと、皇帝の寵愛を失い、後宮で寂しく暮らす女性が思い浮かぶ。多くの詩人がこういう女性たちに詩心をそそられ、美しい詩が作られてきた。

しかし孤愁を嘆くのは宮女ばかりではない。夫を戦場に送り出している妻、夫が行商に出かけている妻など、夫と別れて住む女性をうたった詩も多い。広大な中国、そして通信手段の乏しかった時代、長い間音信もなく、一人家を守る女性の嘆きは深かったことだろう。

有名な白居易の「琵琶行」の、夜中に一人舟の中で琵琶を弾いていたのも、夫が行商に出かけてしまった女性であった。

この時も夫が長く行商に出かけてしまった妻を想定した。秋の夜はただでさえ淋しい。雨が降っていればなおさらだ。かすかな灯の下、ひとり夫に送る衣服を一針一針、丁寧に縫っている女性。心に思うのはもう長く家をあけている夫のこと。さびしい雨の音を聞けば、一層夫のことが思われるのである。

耆老長嘆

耆老長嘆

昔年皆恨人生短

昔年皆恨む人生の短きを

今日却悲餘命長

今日却つて悲しむ余命の長きを

獨戚前途夜窗下

独り前途を感うる夜窓の下

秋風來拂髮邊霜

秋風來り払う髮邊の霜

耆老 老人

漢詩には、人生がはかなく短いことを嘆いたものが多い（しかしたいていは、短いからこそ、今を大いに楽しもうとなるのだが）。唐代の崔敏童は「城東莊に宴す」という詩で、「一年始めに一年の春あり 百歳曾て百歳の人無し」と詠んだ。

ところが今は百歳を越える人は珍しくなくなった。元気でなお活躍しておられる方も多い。では長生きできるようになったことを、手放して喜んでよいかというと、そうはいかない。老人が増えた結果、社会福祉費が含らみ、国の負担、更に若い人達の負担が重くなってしまったのだ。テレビでも新聞でも、老人の年金、医療費、介護費などが話題にならない日はない。現代の老人は肩身の狭い思いをして生きていかなければならない。短い人生だから今を大いに楽しもうではないかという昔の詩を読むと、かえってその時代が羨ましく感じられる。皮肉なものである。

寒日野望

寒日野望

北風吹起出鄉關

北風吹起こつて郷關を出す

今次遠征歸可難

今次の遠征帰ること難かるべし

駐馬西望茫漠野

馬を駐めて西望す茫漠の野

一條行路夕陽寒

一條の行路夕陽寒し

寒關 郷里。ふるさと

今次 今回

一條

ひとつじ

昔の中国の官僚は、遠隔の地へ赴任を命ぜられるか、又は罪を得て左遷されるか、どちらにしてもいつ帰れるかわからない旅に出かけなければならぬことが多かったようだ。

左遷というと韓愈の「左遷せられて藍関に至り 姪孫湘に示す」の詩が浮かぶ。「仏骨を論ずる表」を奉つたため憲宗の怒りを買ひ、都から八千里も離れた潮州へ左遷されることになった韓愈、頸勝の、雲は秦嶺に横たわりて家何くにか在る 雪は藍関を擁して馬前まず、は、これからの旅の厳しさ、もう故郷に帰ることはできないのではないかという不安な心とを表わしているとされる。

右の時の場合、左遷かどうかはわからないが、とにかく遠い西方へ旅をしなければならぬ人の気持ちを考えてみた。

馬上、これから赴こうとする西方を眺めると、茫漠とした野が広がっている。その野の中にわずか一筋通じている道、それを照らす夕陽は寒々として、一層心が冷えるのである。

山湖垂釣

山湖垂釣

四山漸白月西淪

四山漸く白みて月西に淪む

湖畔停筇眼界新

湖畔筇を停むれば眼界新たなり

釣客垂絲結氷上

釣客糸を垂るる結氷の上

朝陽映處躍銀鱗

朝陽映ずる処銀鱗躍る

漸 だんだん。次第に 鱗 銀色に光る魚

子供の頃、父に連れられて釣堀に行ったり、釣船に乗ったことはあるが、それ以来、釣とは全く縁はない。ただ、テレビなどで冬のワカサギ釣の様子が放映されると、なんとなく心がひかれてしまう。

早朝凍った湖の上じっと坐り続けている釣り人達、俗界のことは念頭にないようだ。しかし今は、暖房が完備し、電子レンジや暖い飲物、トイレなどの完備したドーム船が人気らしい。

この時はもちろん、昔風のワカサギ釣。空が次第に白みかける頃、硬く凍った湖の上でワカサギを釣り上げる。昇ってきた朝日の中に、銀色に輝いて跳びはねるワカサギ。釣人の喜びはさぞ大きなものであろう。

ドーム船の中に釣り上げられた魚は、どのような様子をしているのだろうか。暖房が利いているため、すぐにくったりして、跳びはねることなどできないのではないかと、想像してしまふ。

大雪埋檐

大雪埋檐ふゆの雪を埋む

添薪烧栗火爐傍

薪たきぎを添そえ栗くりを焼く火爐かまどの傍かたわら

戶外寥寥夜未央

戶外こがやう寥寥りやうりやう夜未よまだ未央なほはらず

大雪埋檐草廬裏

大雪ふゆ埋もむ草廬くさろの裏うら

小兒老嫗笑談長

小兒しょうじ老嫗らうおんな笑談わらわ長ながし

三好達治に「雪」という詩がある。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ。

第一詩集「測量船」の冒頭の詩。わら屋根の家が点々と散らばる村落、太郎・次郎は当時ありふれた日本の子供の名、三郎、四郎……と続くことが想像される。

遊び疲れてぐっすりと眠る子供、そういう子供達を見守るようにしんと降り積もる雪。やさしい言葉の練り返しが無限の広がりを表わし、なんとも静かでやすらかな村の様子を味わわせてくれる。

「大雪埋檐」という題が出された時、この詩を思い出し、穏やかな雪の夜の村の情景を詠んでみたいと思った。それで赤々と燃える囲炉裏、焼ける栗、孫達を見守るおばあさんにしてみた。子供達は栗を食べながら、きつと目を輝かせて、おばあさんの話に聞き入っていたことであらう。

芙蓉暮雪

ふようぼせつ

險路風寒已夕陽

げんろふうさむくひにせきりやう

函關客舎解行裝

かんげんきやくしゃかいぎやうをげんく

芙蓉欲仰西窗外

ふようよくやうせいぞうのぐわい

急雪霏霏望渺茫

きゅうせつひひのぞみほらほらたり

急雪にわかに降る雪

ある会が箱根で行われることになり、晩秋に芦の湖近くの旅館に行つたことがある。余り気のすすまない会であつたが、久々に湖上の富士を見るのを楽しみに参加したのだ。

ところが、その日は午後から天候が悪くなり、旅館に着く頃にはなんと雪さえちらつき始めた。割りあてられた部屋に到着き、窓に寄つてみるが、見渡す限り渺茫として、もちろん富士の姿は見るべくもない。

がっかりしたもの、しばらくして「徒然草」の「花は盛りに 月は隈なきをのみ見るものかは」という段を思い出した。「雨にむかひて月を恋ひ たれこめて春の行方しらぬも なほあはれに情けふかし」と続く。

そうなのだ。眼前に富士の姿を見なくても、湖にうつる富士の姿を心に思い描き、あわれむのが趣深いのだと思つてはみたが、それをどう詠じればよいのか、あれこれ考えてはみたものの力不足で、結局ただ富士が見えないのを嘆く詩になつてしまつた。

歳暮祭詩

歳暮詩を祭る

獻酒祭詩除夜天

酒カサ

祭る除夜の天

醉中作句意昂然

醉中句を作し意昂然たり

鐘聲殷殷破殘夢

鐘声殷々残夢を破る

机上唯存無字箋

机上唯存す無字の箋

昂然 童気のさかんな様子

殷殷 鐘の鳴り響く音

「祭詩」とは年末に、一年間に作った自分の詩を祭る習わしで、中唐の賈島から始まったらしい。あの有名な「推敲」の故事に登場する賈島である。それ以来、詩人達は暮れになると詩を祭り、詩作の苦勞を慰めてきた。日本でも多くの人が祭詩の詩を残している。

しかし、この題が出された時、何を詠めばよいのか、私には全くわからなかった。もちろん、祭るべき詩などはない。

提出日が迫り、詩語集などをひっくり返してみても、詩句は思い浮かばない。ある夜も全く無駄な時間を過ごしているうちに、つい眠ってしまったらしい。はっと目覚めると、山向こうの寺から鐘の音が響いてきているのではないか。その時思い浮かんだのが最後の一句、なんとか一首をまとめることができた。

いつも悪戦苦闘する詩作、いつかは楽しんで作るようになりたい。そして古人のように自分の詩を祭るといふ風雅な習わしをぜひやってみたいものだと思う。

橋下待人

橋下人（きょうか）を待つ

爲約待人江水頭

約（やく）を爲（な）し人（ひと）を待つ（まち）つ江水（かみづ）の頭（かぶ）

雨繁風急不堪留

雨（あめ）繁（ひげ）く風（かぜ）急（いそ）ぐに留（とど）まるに堪（た）えず

忽思重信尾生事

忽（たち）ち思（おも）ふ信（しん）を重（おも）んぜし尾（お）生（せい）の事（こと）

橋下徘徊感激流

橋（きょう）下（か）徘徊（わいはい）し激（げき）流（りゅう）に感（かん）ず

これは「尾生之信」という故事に基づく詩題。昔、中国魯の国の尾生という男が、ある女性と河の橋の下で会う約束をした。

尾生は約束した時間にその橋の下で待ったが、女はやつてこなかった。そのうちに上げ汐となり、河の水がだんだんふえてきて、身体を浸しはじめた。それでも尾生は辛抱強く、そこで待ち続けた。やがて水が頭を越すほどになり、橋脚に抱きついたが、とうとう溺れ死んでしまったというのである。

この尾生に対して、信義にあつい男とたたえる説もあれば、本当の生き方をわきまえず、大事な命を粗末にした男と非難する説もある。多くの人は後者の説に賛同であろうが、信義などないがしろにされること多い現代、尾生のような人も尊敬されるべきではないか。

尾生が孔子の生まれた魯の国の人というのは、いかにもふさわしい。それにしても、相手の女性はその後、どうしたのだろうか。いろいろ小説ができそうである。

夜雨孤愁

夜雨孤愁

半夜咨嗟挑短檠

半夜咨嗟し短檠を挑ぐ

新粧凝得却傷情

新粧凝らし得て
却つて情を傷ましむ

待君側耳西窗下

君を待ち耳を側つ西窓の下

唯聽蕭蕭簷雨聲

唯だ聴く蕭々たる簷雨の聲

唯 ためいきをついて嘆く 燒燭 ともし火をかきたてる

秦腔は中国西北地方最古の伝統演劇、京劇などにも影響を与えており、劇曲の祖とされているそうだ。昔、初めて西安に行った折に見たが、面白いとは思わなかった。確か裁判物で、内容がわからなかったのだ。

それで余り気乗りはしなかったのだが、又、秦腔を観る（本当は聴くだろう）機会があった。しかし今回はわかりやすいもので、すべての演目が面白かった。

特に若い女性が恋人の来るのを待つ曲は、恋しい人を持ちいそいそとする様子、なかなか来ないのでいらいらする様子など、実に細やかに演じられてすばらしかった。

娘を演じたのは十代の若者とか、声も姿も美しく、すっかり魅了された。江戸時代初期、大いにもはやされたもの、風紀を乱すという理由で禁止されたという若衆歌舞伎、その役者連もこのように美しかったのだろう。

あの西安の舞台を懐かしく思い出しながら、この詩を作ってみた。

江頭離宴
源氏物語 明石上

江頭離宴
源氏物語 明石上

水閣煌煌賓客連

水閣煌々賓客連なり

賀君歸洛醉華筵

君の帰洛を賀し華筵に酔う

帳中恨別可憐女

帳中別れを恨む可憐の女

獨聽櫓聲方泫然

独り櫓声を聴いて方に泫然たり

水閣 水辺のたかどの 流鶯 涙のはらはらと落ちる様子

父、桐壺帝崩御の後、権勢は源氏と対立する右大臣方に移った。煩わしいことが多くなつた源氏は須磨に退居。暴風雨に襲われた後、明石の入道により明石の浦へ迎えられ、そこで源氏は入道の一人娘、明石の上と結ばれる。

まもなく朱雀帝の宣旨が下り、源氏は都へもどることとなる。人々は大喜びし、帰京を祝うが、一人悲しみに沈む人がいた。明石の上である。もともと明石の上は自分が身分の低い（父入道は受領でしかなかった）ことを恥じていた。京には正妻格の紫の上がおられることも承知している。しかもこの時すでに身重となつていた。将来のことを思うと、どんなに不安で辛かつたことか。皆がめでたいと喜びあつてゐる姿を、几帳の陰で一人悲しんでいる姿を想像してみた。

但し、後に源氏の六条院の冬の御殿に迎えられ、生まれた女子が（紫の上の子としてであつたが）中宮となつたのは幸いであつた。

清夜彈琴 小督局

清夜琴を弾く 小督局

君寵却招丞相冤

君寵却つて招く丞相の冤み

逃來茅屋尚銷魂

逃れ来る茅屋尚銷魂

深更私奏想夫戀

深更私かに奏す想夫戀

唯有清光照淚痕

唯だ清光の淚痕を照らす有るのみ

丞相 大臣

銷魂 非常な悲しみや驚きで魂が消えたようになること

想夫戀 種葉の曲名

「彈琴」というと思ひ出されるのは平安末期の佳人、小督の局である。平家物語に登場する悲劇の女性は多いが、この人もその一人。たぐい稀な美貌の持主で琴の名手だった小督の局は、高倉天皇に深く寵愛されるが、中宮徳子の父、平清盛の怒りに触れ、京の郊外嵯峨野の奥深くに身を隠した。

高倉天皇は小督の局が忘れられず、源仲国に局を捜すように命じられる。丁度仲秋の頃で月の美しい夜、仲国は人里離れた嵯峨野のうちを尋ね歩いたところ、ある小さな家からかすかに琴の音が聞こえてきた。耳を澄まして聴けば曲は「想夫恋」、仲国はついに局を捜し出すことができた。高倉天皇は局をひそかに宮中に呼びもどしたが清盛に知られ、局は無理やり出家をさせられてしまったという。

ひっそりとした嵯峨野の粗末な庵で、澄んだ月の光の下ひそかに琴を弾く小督の局、さぞかし涙がこぼれていたことであろう。哀れをそそられる場面である。

岸頭望海 俊寛

岸頭望海を望む 俊寛

特使纒來倒屣迎

特使纒かに来りて屣を倒にして迎う

赦書何料莫吾名

赦書何ぞ料らん吾が名莫し

岸頭頓足叫蒼海

岸頭頓足して蒼海に叫ぶ

帆影空消波浪平

帆影空しく消えて波浪平かなり

側履 はきものをさかさにはき、急いで

頓足 足ずりをする

「俊寛」は能の演目の中、私の好きなものの一つである。

京都鹿ヶ谷で、平家を滅ぼそうと図ったとして、俊寛、平康頼、藤原成経の三人は九州南方の鬼界ヶ島（硫黄島？）に流罪となった。滅多に舟も来ず、まともな衣服も身につけず、言葉も通じないような人の住む島に、三人身を寄せ合って過ごしてきたが、思いがけなく都から赦文を持つた使いの船が来る。中宮徳子（清盛の娘）懐妊のため大赦が行われたのだ。

しかしそこには成経と康頼の名前だけで、俊寛の名はなかった。半狂乱になった俊寛は都に帰る船のとも綱に取りついて「のせ給え」とくどくどが、船人達はその手を引きのけて船を漕ぎ出して行く。

たった一人恐ろしい島にとり残されてしまった俊寛。能の最後、舟影も人影も消えて見えなくなり、跡消えて見えなくなり、は、余韻纏爛と俊寛の悲痛な心を表し、いつまでも心に重く響く。

観美人圖

額田王

美人の図を観る
額田王

文雅宮中第一人

文雅の宮中第一の人

翠鬢紅袖粉粧匂

翠鬢紅袖粉粧匂

層層堂塔映天處

層々たる堂塔天に映する處

神采謳歌飛鳥春

神采謳歌す飛鳥の春

文雅 みやびやかなこと

翠鬢 黒々としたまげ。美人の髪をいう

神采 けだかい姿

「観美人図」という題を見た時にすぐ浮かんできたのが、安田観彦画伯の「飛鳥の春の額田王」である。彼方に霞む大和三山、その前に数々の宮殿・仏閣・五重塔、それらをバックに、唐風に装った額田王の姿が大きく描かれている。黒い髪、赤い上衣が印象的で、一度見たら忘れられない絵だ。

額田王は大海人皇子（後の天武天皇）、後にその兄の天智天皇の二人に愛された美人。それだけでなく、万葉集中にすぐれた歌を残す才色兼備の女性。まさに「飛鳥の春」を謳歌するのにふさわしい人だ。

題詠は経験したことがない題が出されると、何を詠んだらよいか悩むことが多いが、この題の場合、自分では全く思いつかない題で、新しい詩を詠むことができたのがうれしい。

この時の教室は、「王昭君」、「上村松園の「序の舞」、ゴヤの「裸のマハ」、それに「モナリザ」などさまざまな美人が登場しておもしろかった。

作詩に支えられて

一人暮らしの私の老後は、多分寂しいものになるであろうと覚悟をしていましたが、これは全くの杞憂でした。それはひとえに作詩に出会えたおかげです。

五十代の終りに、石川岳堂先生の作詩の講座に入れていただいた後、母の介護をしなければならなくなったものの、皆様に助けられてなんとか作詩を続けてきました。おかげで母が亡くなった後も、漢詩を作ることに追われて、一人暮らしになった寂しさを、余り感じずにすみました。

この頃、全日本漢詩連盟が設立され、国民文化祭の「漢詩大会」、佐賀県多久市の「全国ふるさと漢詩コンテスト」などが開催され、それらの大会で全国から集まられた方々との貴重な出会いがありました。

特に神奈川県漢詩連盟が設立されると、この会員の方々は非常に熱心で、各種の漢詩鑑賞会、研修会、そして漢詩を作ろうとする人達のための初心者入門講座等、

次々と企画され、私も及ばずながら「舞笛女子会」で女性関連の詩を中心に話をいたしましたしております。

そして第一代神漢連会長の中山清先生が亡くなられた後、湘南朝日カルチャーセンターの講師を引き継ぐことになり、頼りない添削ですのに、いつか五年を過ぎました。これらの会を通してお知り合いになった方々のおかげで、狭かった私の世界がどんなに広がったことか、これはひとえに作詩のおかげと、深く感謝いたしております。

八十歳を過ぎ、「水葎七絶集」のあとに作りました詩の中から八十首を選び、前にならぬ拙い文を添えてみました。ご覧いただけますならば幸いです。詩は、石川岳堂先生、それに窪寺貫道先生をはじめとする「二松詩文」の先生方のおかげでできたものばかりです。ここに深く感謝申し上げます。

今回も面倒な出版を引き受けてくださいましたフタバ企画、関谷真一様に厚く御礼申し上げます。

平成二十九年十二月

古田 水葎